檜山相馬忠勇傳

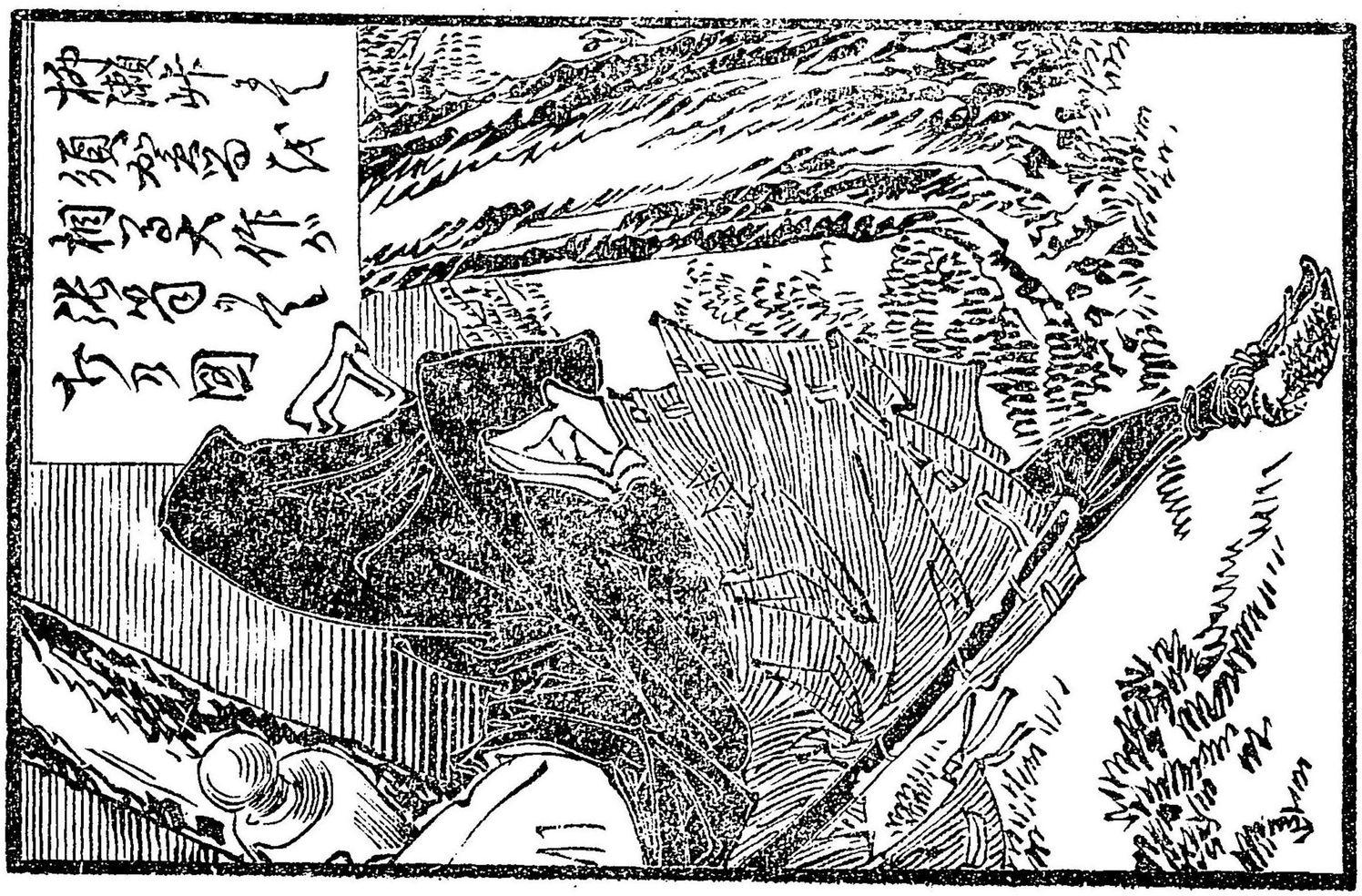
117
3
139

仙史性野乗稗史ヲ讀ヲ好ミ操觚ノ暇アル時ハ唯ダ書ヲ友トシテ無聊ヲ遣リ倦ハ則チ書ヲ枕トシ眠ル一日坊間ノ演講場ニ遊フ講師壇上ニ在リ瀏辨蕩々南部藩士相馬大作忠勇ノ事蹟ヲ演ズ坐ニ就キ之ヲ聞クニ其濫觴檜山藩ノ事ニ原因シ該藩士尾崎秀之助ナル者其兇暴ヲ憤リ奮然回復ノ大志ヲ興シ名ヲ相馬大作ト更メ耐忍不拔ノ鋭志ヲ擢キ膽ヲ嘗メ薪ニ臥スルヿ數年千辛屈セス萬苦撓マス區々タル一孤身ヲ抛チ以テ堂々タル豪族ヲ斃シ遂ニ宿昔ノ本懷ヲ達シ本藩ノ汚辱ヲ雪ク偉功ノ顛末ヲ演ス仙史聞テ首ヨリ結局ニ至ル其間或ハ哀ミ或ハ怒或ハ愁或ハ惡ミ其宿志ヲ果シ而自首從容死ニ就クノ局

ニ至リ感激禁マラス覺ヘス案ヲ扣チ大喝一聲嗚呼快ナル乎相馬壯ナル乎大作ト號ヒ驚而醒レハ則南柯ノ一夢ニシテ夢中聽ク所ノ事歷尙ホ耳底ニ在リ因テ筆ヲ援キ條ヲ逐ヒ其顚末ヲ臚記スヽ之レ仙史平生嗜好ハル所ヲ夢ミルモノニテ所謂五夢中思夢ナル者乎固ヨリ夢中ノ聽聞ニ係リ其事蹟前後幽冥渺漠風ヲ捕ヘ影ヲ打ツノ談ニシ世曾テ此事無キヲ信ス然リト雖ヒ大作カ耐忍不拔ノ精神能ク强ヲ挫キ弱ヲ扶ケ其素懷ヲ果孤忠君國ニ報スルノ思想ニ至テハ眞ニ偉丈夫ト云ヘシ其他之ニ關スル勇壯義俠ノ人士モ亦共ニ感賞スルニ堪タリ其忠勇ノ美名ヲ後世ニ遺ス豈偶然ニアラス寓言モ亦タ勸懲ノ一端ナラン乎看官諸君痴者夢ヲ說クノ妄談ト之レヲ棄テス幸ニ愛讀ヲ辱フセラルヽニ於テハ編者ノ幸甚ト云爾

明治十九年十月上澣

夢香仙史



南部茶屋
相馬大作
對面ノ図

檜山忠勇鑑目錄

第壹回　尾崎秀之助盛岡出立之事

第貳回　中山幸之進馬術に妙を顯す事
　　幷戸坂の娘お千代秀之助を戀慕の事

第三回　秀之助相馬權現へ誓願の事
　　幷雀の宮にて須賀留を討事

第四回　大作須賀留の乘物を砲發する事
　　幷砂手渡し場にて須賀留を騷かす事

第五回　大作須賀留を討取る事
　　幷大作伊達三次面會の事

第六回　伊達三次景清源太を討事
　　幷綱五郎土場へ立寄事

第七回　綱五郎青鬼の片腕を斬事
　　幷綱五郎井筒屋を退く事

第八回　井筒屋家内騷動の事

第九回　於千代砂手にて艱難の事
　　幷於千代再び危難の事

第拾回　喜三郎國定於千代と名乘逢ふ事
　　幷三日月藤兵衛發心の事

第拾壹回　尾崎富右衛門於千代に面會乃事
　　幷腕の佐吉瑕疵を蒙る事

第拾貳回　阿武隈ケ原大取合の事

第拾三回　郡役所裁決の事
　　幷關良助須賀留備中守を狙撃する事

第拾四回　關良助檜山奉行を討事
　　幷關良助所刑綱五郎義死の事

第拾五回　相馬大作縛に就く事
第拾六回　大作妙見堂に須賀留を窺ふ事
第拾七回　大作淺卿妙見堂にて須賀留家を騒かす事
第拾八回　大作味噌屋と成て須賀留家を窺ふ事
　　并須賀留右京亮を砲殺する事
第拾九回　大作盛岡に歸り家續取決の事
第貳拾回　南部大膳大夫大作に對面の事
　　并南部檜山を取返す事
　　附
　　大作良助刑に所せらるゝ事

特10
694

檜山忠勇鑑

第壹回　尾崎秀之助盛岡出立の事

八皇ハ一百二十代仁孝天皇の御宇時の執政德川十一代の大樹文恭院殿源家齊海内靜謐の鎮撫を仰く時にて天保年間將軍の城廓火災にて灰燼して御館造營の際に臨み兼て奥州南部領内檜山にハ數多の良材有る趣上聞に達し在りければ幕府則ち南部家に令し數本の檜材を獻納すへき旨を傳ふに當時檜山奉行某檜材之れ無き趣を答て是を獻せざりしかば此時須賀留家より上達して南部の領地七十有余里の檜山を奪ひ造營の用木を獻せり是か爲めに南部の家門衰微を興すに至る此期にいたり忠勇の英士あらわれ國耻を雪き禍難を鋤く其原由を委しく尋ぬるに爰に奥州岩手郡盛岡の城主其高貳十万石南部大膳太夫殿の家中に家老職を務めし尾崎富右衛門が一子に秀之助と云者あり幼少の時より英才智慮衆人に踰て其性質强まじく羸弱を助け强驕を挫く○機備り普く天下に其美名を揚さんとの大志を興し日外ハ好機會を得武術修行として廻國せんと晝夜思ひ暮しけるに一日父富右衛門世界全圖の畫圖を出し一子秀之助か前に置解て曰悴此繪圖を見よ廣き世界の其中に我日本ハ他の國

に比すれば一扇の要め程なり然れども古より賢貴の人出て智識を磨き文武の道に欽し故に彼外夷我神國の勢威に恐れ容易に海内に鋒をよせず是我芦原の中國御裳濯川の後世に清流するゆゑんなり殊に江戸表へ各國の諸侯方參勤交代道路に縱横なし文武修行の人〻多くへ此地に住居を構へ互ひに擧て奇術を競是故に心ある者へ皆該地に至りて藝道を學ぶ者少からず抔と種々東都の形勢を語りければ秀之助へ余念なく聞いたりしが今ぞ日比の心願打明さんと思ひ父のまへに謹しんで申樣私し未十三才の少年にて事の粗良も辨へずいへども一度江戸表へ趣き武術の道に心を委ね今南部の士聖衰惰の眠を覺し且は日本に一個人たるの名譽を顯さんと欲す冀ば父の許可を下し給ふ樣頼入いと申上しかば富右衛門大ひう驚怖なしけれども子を見る事親に如かず其才智群に勝れしをり往末見所ありと思しかば快よく許し呉べしと思案を極めやう其方の願ひ莫大の望みにて感に堪へたりと雖も未十三才の少年にて武術修行の旅立などとは以ての外の事なれども斯まで一心に思ひ立たる事なれば遮さるも余り詮なし汝が心底に任し遣わすべし去ながら江戸表へ始めて參る事なれば土地の勝手も不都合なるゆへ山城屋方への添文を遣わすべしと筆を染さら〳〵と書認め

一封の手紙を渡しければ秀之助大ひに喜悦し一親よ重ねて云様私し修行卒業の後迄は暫らく我をなき者と斷念決して心遣ひ下されなと堅く勵まし置置せぬ名殘もうこ〳〵に憂を岩きし旅立も萬夫不當の器量の壯士なり父母を本國に殘し父の手紙を懷中して旅の用意の整へて吾妻の空へ急かんと古郷を跡に打詠足に任して道芝の剽り〳〵て三日にして同國桑折の驛へ着せしが日は早や西山う沒し夕暮近きたそかれ時秀之助は能き宿を求めんと尋ねて漸々伊達三右衛門と喚し宿屋へ泊りけう偖此家の亭主三右衛門と云者は此驛にて名高き俠客にて別に行ふ内職と制札の裏をく、りし手仕事にて自分が持土場を一軒設け其身は日々勝負所に通ひしが流石老体の加減にや此節い土場も五月蠅くなり子分腕の佐吉に萬事任せけるが爰に鰐口字吉鮟鱇の寅といふ両人の惡もの日々此土場に通ひ詰しが此程三右衛門が立寄さるを幸ひに土場を我所有のごとくに成し無法不埋の振舞多ければ佐吉此事親分三右衛門に語るにぞ三右衛門も憤怒しながら其儘打捨置たりけう扨又秀之助い旅の勞れにてすや〳〵と寐入しが其夜の四ッ時分と思しき頃不斗眼を覺し當邊を見れば是い如何に雲衝ばかりの大男抜足の体にて秀之助が寐所の傍よ置たる刀を奪ひ去らんとする有樣なれば秀

之助起上り直よかの盗賊を引捉へ膝の下よ組敷て亭主〳〵と呼立れば主の三右衛門何事やらんと懸付來て見れば盗賊い我子の三次にて有ければ惚り仰天し詞にいふ盗人を捕へて見れば我子也と今現在に見る事よと怒りの顔色滿面う顯われ悴三次がまへよ進み出汝如何なれば斯う淺猿しき所業を爲や已れ其分にて置へきやと打擲なさんと有けれを秀之助是を宥め是よい何んぞ深ひ譯も有べし先〳〵暫しと押鎮め三次に向ひ其方が只今の爲体何故ぞや其譯を話そべしと問ひければ三次平伏して述けう樣い此驛に鍔口字藏あんこの寅といへる二人のわる者非道にも我父の持土場を奪ひ取りい故心外に存し彼等二人を刺殺さんと思ひ夫もへ御差料と盗み申たり何卒御高免下さるべしとの事の譯柄申述只管其罪を詫ひけれい尾崎手を打て感伏しよきかな〳〵人として斯たる性質い有度き者なり其氣前にめで、此短刀を借與へいへば不義非道の惡人原存分よ刺殺し召されと云しかは三次は是に勵まされ勇氣猶も一倍なし左あらば暫し御刀を拜借と其儘家を立出て土場とさして馳到り樣子如何と伺へばあんこの寅は宵の口より酒食に飽器具も德利も打捨て前後止體なく大の字なりに寐入ければ是は屈竟仕濟したりとあんこの寅を足にて蹴り起し立んとすると只一刀

に切り下げてなんなく首を打おとせり斯とは知らぬ鶏口宇蔵何か包を携へて入口瓦落離と引明て這入らんとする此方より一聲號んて突込む刃よ横腹を刺抜れ血煙り立て相果ける三次は無念を晴して悦び勇んて我家へ歸りけるが其夜も明て鷄鳴曉を告ければ秀之助は宿の拠ひを仕剣發足の用意致しける所へ伊達の三次出來りて秀之助に向ひ云ける様貴殿は是から何國くへ御越しなるやと尋ねしかば秀之助我ら武術修行の爲江戸表を志ざして参るなりと云ければ三次は左あらば何卒下僕を御召連下され度御同伴仕べしといひければ秀之助も三次の器量末頼母しく思ひければ然らば御同道申べしと秀之助は三右衛門へ一禮述て又三次は父へ別れを告二人の若者道連よて江戸表へと急き行

第二回　中山幸之進馬術に妙を顯はす事
并　戸坂の娘於千代秀之助を戀慕の事

斯て秀之助三次の両人數日よして江戸芝札の辻まで連立しが秀之助三次に向ひ中やう我い是より能師匠を撰み武藝修行すへき所存なれば貴殿もよき師を求め上達致さるべし互ひに立身出世を期すべしと此所よて両人相別れ又の再會をぞ約しける偖も秀之助い夫より本所松居町武丁目山城屋武左衛門方へ参り父よりの手紙を渡し萬事世話ゝ頼みやべしと有ければ武左衛門先手紙の封を切て讀ければ前年大恩を請し尾崎富右衛門よりの頼み狀なれば是い〳〵貴方が尾崎様の御子息に渡らせ給ふか何はともあれ先奥へといざなひ色々饗應いたしけるさても此武左衛門い本綿商賣にて廣く諸侯方へ出入なし江戸表にて名代の商家なり秀之助當家に凡五六日斗り逗留して名所古跡大概て見物し今日い両國橋の邊りを通り掛と橋向ふより立派なる侍ひ馬に鞭して飛馬の如く馳來りまた此方よりは車力速めて詰の辻を曲る都含に車馬相對しあわや如何なるへきやと往來の人々膽を冷し見る中に馬の上よ有た侍ひは手綱を後邊よ引立て縮めて身を捻れい馬は両足上へ揚げ立止つたる其奇術に双方無事よ行過ける此体を傍に見物してありし秀之助大ひにかんじ馬術の師を願へきは此人なりと自分勝手に心を極めかけ行馬の後より一目散ゝ附したひ行しよ彼の馬上の侍ひい紀州の屋敷の門口にて馬を止めて下んとそるを秀之助は馬の轡を聢りと捉へヤ様我社は南部の者よて尾崎秀之助とヤ者なり只今斗らぬも貴方の馬術よ感伏せり何とぞ不肖ながら今日より門弟になし下されかしと頼みければ侍ひい見所ある者と思ひければ我家に入れ當時何れ

に宿を定めたるやと問ければ秀之助ハやう宿ハ本所松居町山城屋武左衛門とヤ方なりといひしかば則ち人を馳遣り武左衛門と呼迎へ委細尋ねゑかば武左衛門私し宿請仕ハ間門人になし下されたしと願ける此武家ハ何人なるといふに紀州家に於て馬術を師範とする中山幸之進といふ人なり秀之助ハ先此家にて十五才の年まで朝から晩まで馬術を稽古し晩後より禮學射書數畫など殘る所なく學び盡しけれども いまだ劔道を稽古せざるをうれひ中山殿に依賴しよき師を得んと思ひ慕しけるが或日秀之助稽古の寸暇ゑ裏邊に出てあたりを詠め居たりしに隣り屋敷ゑて竹刀の音が勵しく聞へしゆへ耳欹て、伺ひしが案に違はぬ劔術の稽古なれば秀之助大ひに歡び能き師を得たりと中山幸之進を頼み親分にて隣り家敷戸坂内記といへる方へと入門いたしける

因に曰く秀之助の如き器量の者が現在隣り家敷に劔道の師有を知らざるハ不審に似たるとと雖も左にあらぜ此戸坂内記外地に道場あつて是ゑ稽古いたせしなるに此度び我家に道場を設け引越したれハなり

斯て秀之助ハ丸壹ヶ年が間晝夜を分たず劔道を勉勵せし故大時不敵の手並になり是なれハ

最早大丈夫と勇び勇み其中に光陰矢の如く十六才の春を迎へ愛ゑ戸坂内記の方にてハ初稽古と有て數多の門弟衆集ふて道場ゑ並び我劣じと仕合を勵みける此時秀之助も來りて仕合いたしけるが此内記の宅に二女あつて姉を千代といひ妹をつじと呼しが此二人の娘名高き尾崎秀之助の仕合を見んと道場の此方より見物して居たるが秀之助の風体さながら野卑の如く頭上の髪ハ縮みて面色垢黑く衣服着古く實に見惡き形さまなれども じつと瞬し詠むれハ何處に美風を備へ自然と人品骨がふ顯はれければ二人の娘秀之助に戀慕ひ取分け姉のお千代ハ彌増て此節只ならぬ有さまにて晝夜臥床を離れぜ父の内記は大ひに心痛をなし良醫を迎へて療治を盡せども其しるしなし或醫のヤにハ是ハ氣病ひなれば本人に得と御問ひ遊ばさるべしと教へしかば内記ハ乳母にヤ相千代が病氣の義を問呉よと頼みければ乳母お千代に暑ねしゑ全く秀之助に戀慕ひ氣病ひの由ヤ上れば内記ハ聞て大ひに當惑し先秀之助に此事を明し何卒不束ながら姉娘千代をヤ房に持下されかしといろ〳〵頼みけれども元來大望ある秀之助なれば一朝一夕に請がわぜ宜しき返じもなかりしに愛に内記が門家に老弟子の山下嘉十郎といふ者あつて秀之助を一間に招き申けるやうハ扨此たびハ當家の娘子お千

代さまが足下を慇懃ひしを新内記郎より足下に色々縁儀を頼み入れらるゝも何か不足にて御否みなさるや又御身ハ其義を思ひ仁恵を全ふし給ふに今一命の危き婦女子を打捨らるゝハ余り其意を得ぬ何卒この縁談を私に面じて御請ひ下さるべしと言葉を盡して申けれども秀之助ハ兎角に承知なく御遵の仰尤至極なれども我ら両親の有身分にて容易く一已の了簡に相言難しと云へども傍への唐紙押明て入來たる中山寺之進申やう此度の縁談不佞か親御を兼て媒ち致すべし快よく請がび下されかしと中山山下両人が左右より責立れば秀之助も詞方盡て左あらば請かひ申べけれども私し未だ心願を果さぬ依て心願成就の後よハ質の如姫仕べし此度ハ只〳〵偽の誓ひにて夫婦紐束の縁を結ぶべしとありければ此事とも兼て訳はじめお千代に申せしかば親子ともに悦ひて後の縁儀を待にける扨秀之助にハ色情の事ハ少しも思わず只〳〵藝道にのみ心を委だね修行怠りなかりける爰に三月彌生の節句何國も内裏雛を祭るハ何處も同し嘉例にて内記の方にも悦ひを賞しお千代ハ酒肴を拵へ山下嘉十郎に持せ遣り夫秀之助へ饗應なし膳を勧めける故秀之助大ひに歡び是ハお千代どのよりの馳走有難く頂戴仕るべしと箸を取んとせしかば山下嘉十郎席を進み謹でいふ

やう如何に秀之助殿此膳部お千代さまの馳走なるが君にハ如何思ひて食しめさるやと問ひしかば秀之助ハ打笑ひ是ハ〳〵山下殿にハ異事をの給ふかな假にも女房お千代どのの馳走其深切を悦び食する所ありと答へければ山下申やう貴殿ハ此頃此樣な女や酒食の榮耀をなし玉ふ時にあらぬ早々御思慮を廻らし玉ふべし抔といへば秀之助一切合點ゆかぬもへ山下に向ひ此秀之助ハ榮耀榮花酒食女に狂ひおと一切仕らぬ何故左樣なる事を仰らるゝやと尋ねしかば山下申やう夫でハ御身ハ未だ國元南部の樣子御存しおさや御國元に於てハ此度將軍家の造營に付枝下三間直徑壹尺の檜木其數貳百本献納致すべき旨御達し有しに檜山奉行荒浪十藏治に依て無き旨を答へしかば此時須賀留家より仰の檜木を献納仕るべしと上達せしかば將軍家より其方の領地に檜木有やの趣き御尋ねに成しに須賀留の答へにハ南部須賀留の境ひ數里にわたりし檜山南部の領分に有て南部の領分にあらず故に用達仕べしと南部領の山脉に登り八十三里が其間須賀留領の棒杭を建て奪ひ取たるよし此檜木山を取返す者ハ御身より外にあらぬと物語ければ秀之助おどろきながらさもなき体にて左樣なる騒動有しや目さす相手ハ歴々の家柄なり高か知れたる匹夫の我らごとき者壹人位ひ何ほど思へば

とて及び絶たる事なりと一向取敢ず余所の事の様にやけれど山下も言葉なく立去りける扨も秀之助は山下には斯は答へしもの、兎角に本國の事ゞの氣に掛けれは直様筆を染し先女房千代への離縁狀に内記への禮狀を添て一封とし又中山幸之進へは是まで永く大恩受し禮狀一封猶亦山下へ懇切にいろ〳〵世話になりし禮狀都合三封の狀を中山宅へ残し置其儘此所を發足して相摸地さして急き行

第三回　秀之助相馬權現へ誓願の事
并壺の宮にて須賀留を討事

去程に尾崎秀之助は相州足柄山相馬大權現の神社にぞ來る是は平親王將門の靈を祭る將門反き貞盛秀郷の爲ゑ廣嶋山ゑ亡滅す故ゑ此神古今の荒神なりとぞ

則ち秀之助は右の太股を切拔き神前に供へ拜殿に稽首して心願を籠ぜひて曰く今般僕主家の爲に須賀留家三代まで殺誅を加へんと欲すわれ冀べ神明の靈驗を垂れて御力を添かしと祈りけゝ是より号を改め下総浪人相馬大作と名乗る時に拜殿の中に人あつて此事を聞、世にも能く似たることを願ふものもあるかなと思ひ拜殿より卒と出此者を捕へ俱に須

賀留を打の協力をなさんと闇き所を捜り見るに手よさわつたる衣服の袖瑕かと摑み其事實を問んとせしが大作ハすハ一大事を聞れたり顔見られてハならじと振放して逃んとするに此方ハ袖を捕へて放さぞ互ひの力に袖ハちぎれて此方ハどつと打轉び大作ハ見向きもせぞして馳行けり又此拜殿より出し者ハ何人ぞいふとよ是奥州須賀留の名刀鍛治よて國景の門人喜三郎國定といへる者にて七日前より當社に通夜せしなり何故へ國定此社に通夜せしといふに鋼匠國景須賀留家より守り刀を拵へ呉べき旨依頼を請け心を盡して鍛ひ上しよ國景生涯に稀る良刀を拵らへたれば此刀御差料に成し給はり度よしヤ上しかば短慮にも大ひに怒り給ひ直ちに國景を手打になし給ひしなり故に門弟の國定此無念を晴さんと思ひしなれども相手ハ何條大家なれば神の助力を假ではと荒神なる相馬神社に祈願せしとあり

因にいわく相馬大作人よ一大事を聞れながら逃さるハ余り其意を得ぞして比興に似たりといへども全く左よあらぞ其身木懐を達するまでハ大切の體た故よ假令欽道の嗜み

あれども、万斗逃るに手あしと肝要の心意成べし

扨も大作ハ足柄山を立退き夫より諸々方々と懸廻る中に蟬べみ清兵衛なる者の請人よて南

部馬飼場の別當よ這入り迄元來大作ハ才智勝れし者なれば壹ケ年程の間に馬の飼様育て方の工合或ハ飼葉馬の洗ひなど殘る方なく習ひ覺へ最早や是あれば何方へ別當に這入りし迚も大概馬の養ひ様ハ出來るべしと思ひければ暫くも此處を退ぞき又もや江戸表よ來り馬喰町武藏屋千太郎といふ宿屋へ泊り凡四五日余りも逗留し一日亭主の千太郎を呼ヤけるやうハ外の事にも有ぞ其許に折入て頼度事あり當江戸表に中間別當の奉公に有付たひが何と亭主世話をして呉かしといろ〳〵頼みければ亭主ヤ様奉公は諸方に多く這入込み口が御座れとも確とした請人がなひ時ハ何方の屋敷にも差入ヤ事相叶ひヤさぞと相斷りければ大作申やう然ハ其請人がなき故に其許か請人と成り呉よ其代りに此金子と両刀を汝よ預け置べし若また紛れ事ても出來し其節ハ其金と刀にて事を相計かるべしといひしかば亭主さぞから慾と笑つれなれば是ハ手當物を以ての御頼みとハ面白き仇かぞ如何にも御世話仕るべしと直さま方々を尋ねけるよ折よく爰に須賀留の馬部家より別當奉公人の穿鑿中故大作に此方は如何と尋ねしかば大作も須賀留とあれば望む處なる故に大ひよ歡び直さま別當風の衣裝を着し假名を下總の秀吉となし須賀留の大部家へ入込みける扨此大部家よ飼ひ育つる馬は

日々悪馬斗りよて駿馬良馬とていおく又飼餌も別當が減り取て十分に與へされば馬い自然こ疲せ衰へて骨筋立て荷馬よも劣る訓りの有さまあり然るに秀吉が部家入してより以來良馬多分出來るなり秀吉い馬に飼餌を多分に與へ又洗行も怠りなく能晝夜を別たず養育おしける故實に馬い逞くなり又外の別當等い一人持飼の馬五疋或い八疋なるに秀吉い一人に二十疋余りも持飼するゆへ部屋頭大ひに是を感ける此事いつしか須賀留殿にも聞へけれい召れ御傍別當にゐ取立ありける恁て其年の八月十五日須賀留殿にい雀の宮まで遠乘りの催し有りければ大作い是屈竟の折なりと内心に深く悦び彌々日限明日と定まりければ大作馬屋に來りて殿の乘馬に飼餌をば與ふ日に白米を一掬み入置馬の爪を斷時足の裏をさり置さて翌日を今やくと相待ける早其當日に相成ければ殿にい裝束錦繡にまとわれ鹿毛おる馬に打またごりわつかに御供二人を引つれ下總秀吉に先と拂わせ雀の宮迄遠乘りありしに既に宮近く來る時に殿の馬い飼餌の利目にや供の馬より遙かに先立凡道法五六丁も隔たりける此時殿の馬い自然と足の痛みを覺へ進み兼たる有樣なれば別當秀吉爰なりとて馬の傍に近寄と見へしゞの痛みし馬の片足を骨も碎けと蹴上れい唯さへ痛みし其上に蹴られて何條たまるべきや兩足折て横樣にどつと倒れて伏しけれを殿いたおらを眞逆さまに落馬有しを秀吉得たりと近寄て殿を一突あてけれを其儘息い絶たりける此時に秀吉い素知ぬ体にて後供の侍ひに殿の御落馬を申上ければ二人の從士大ひに驚き走來りて是を見れを最早息い絶しゆへ先殿の遺骸を屋敷へ引取病氣届を爲し事濟けるゞの如何にも今日の始末下總秀吉御傍に別當たりしゞの合點の行ぬ事ありし故馬の飼塲を改め見るよ白米少し殘りあるもへ是正敵秀吉の仕業なりと直樣秀吉を呼寄種々と糺明に及び別當凡五十人斗り十重廿重よ取卷て召捕んと致せしかば秀吉い事ともせず當るを幸ひ切立薙立瞬間に數十人を打倒し一方を切拔て虎口を通れ何處ともなく逃去りける

第四回　大作須賀留の乘物を砲發する事　幷砂手渡し塲にて須賀留を騷がそ事

扨も相馬大作い須賀留の馬部屋を逃去り其翌日早天江戸市中所〳〵ゑ張紙をなしける其文面よ曰

今般須賀留多京事悪逆無道の擧動を行ひし故天に代りて是を誅戮する者い下總浪人

右の如く所々に張紙有けるゆゑ須賀留の諸士等大ひに驚き人を馳せて張紙を取らせ憎き相馬が所意なりと專ら詮義嚴重に致しける扨も相馬大作ハ江戸を退ぞき信州神宮寺村高橋市郎右衛門が宅にて足を止めける偖も此高橋といふ人ハ信州一國にての豪富ゑして平常風雅の道を好み我裏に別に長家を建一藝の有ものを招き抱へ自身ゑ百般の學術を試みて朝夕の樂しみと致しける大作此事を途中にて聞こは能便り所ありと假に又改名して江戸牛込藁店の書師宗丹と名乘りて當家に這入込みけるが凡百日余りも逗留して空敷光陰を送りしが爰ゑ此家の下男ゑ三助といふ者の勸に依て山間へ小鳥を打に行けるが山々の景色を詠め麓の方を見て居たりしが一筋の街道あり大作三助に向ひ尋けるハ此下に見もる街道ハ何れゑり何方へ通行する道なるやと有しゝば三助答へけるハ此麓の街道は須賀留街道なりと申ければ大作是を聞て心中に笑を含み先此日は両人の者ハ立歸りしが大作思慮を廻らし夜分人の寐入しを伺がひ密に張扳筒の鉄砲を拵らへ人の入來る時ハ疊の下へ隱す手筈ゑして人目を忍び夜な〳〵怠惰おく張扳筒を制して須賀留の歸路を狙撃なさんと專ら心魂を碎きける

然るに大作例の如く張扳筒を拵らへ居る所ゑ隔ての唐紙を引明入來る一人の男あり大作が傍近く來る故大作手早く筒を隱して彼の男の顔を打詠めけるにかの者の申ける〻他の貸座敷へ一言の挨拶も致さゞ這入し無禮の段眞平ゆ高免下され度ゆあり併し只今傍へより伺がひしにゆ邊今手細工にて拵らへ給ふハ全体如何なるものにゆやと尋ね掛られ大作ハ勃然として大ひに怒り此如麁忽なる事と問ふ者かなゆさか違へば討果さんと思ひけれハ一言半句の答へもせざりければ彼男猶も大作の傍近く進み寄て密かゑ語りけるやうハ我ハ元奥州須賀留の刀鍛治國景と申者の門人にて喜三郎國定と申者なり然に師匠國景ハ須賀留家の爲ゑ御手打にあひ心外の余り去ぬる頃相州足柄山相馬神社へ心願を誓ひしに貴殿も同じく須賀留を恨み心願を籠給ひしを聞しゆへ互ひに協力あして倶に須賀留を恨を晴さんものと思ひしに貴殿ハ其時袖を振切てゆ退去有しもへ何卒して彼のゆ人に今一度廻り逢んものと所々方〻を探り求れども一向相知れざりしに唯今當家に於て對面致す事是全く相馬神靈の御引合せなり何卒此上ハ兄弟の誓ひを結び下されかしと心底を打明て又余義もなく頼みけれゞゆ大作ハ此樣子を遂一に聞取左あらば其時に出逢たるに足下にて有けるやと此時互ひに打

肿て終に兄弟の誓ひを致しける時よ大作申けるゝ唯今我等此張扳筒を拵へるゝ須賀留を砲撃せんとのした拵らへなりと語りければ然らゝ我も又刀に手をよせて鉄砲玉を拵らへ進すゝしとて是より國定ゝ刀を鍛ふその際に玉を拵らへ互ひに其用意に心を盡しける爰に又須賀留備後守どのよは江戸表より御歸國の道すがらいよ〳〵今日柳瀬峠の麓をば御通行の前腮ありければ大作國定の両人大ひに悦び直様用意ゝ整へ栁瀬峠をさして先廻りをなし國定ハ麓にあつて服を打留しや仕損じたるやの實否を見留んと傍へある木蔭よ身を忍び居る又相馬大作は峠の頂上なる天狗の宿り木と名付し大樹に身を寄て今や來ると相待居たる所へ須賀留服よは數多の徒士と召具し堂々として通行致され乗物の周圍には重臣守護をあし既に天狗の宿り木の順道に乗物の來ると思ひし頃大作は此期を外さぢして討取んと鉄砲の覘を定め火門を切て打放せば彈丸山響に響さて一發ゝ先手の乗物を目かけて打扳ければ從士は大ひに狼狽あし慌に曲ものは山手の方よりなりと面々よ手分をなして山の隅〳〵草を分て搜ける此時大作ハ一目さんよ麓に下り途中にて金昆羅參りの衣類と自分の衣類と取換へ前に守り札を掛て金昆羅參りの風体にて道を急ひで來りしが南部と須賀留さかひなる神宮寺川の渡し場砂手といふ所まで逃延けるもはや大丈夫ありと少し心を休居たりしが向ふの方を見るに渡し守大勢打寄て何角喧嘩の挨拶をする体あれば何事ならんと近付見れば盲目の女順禮を三人の侍ひ打寄て今や手打よ致すべき有さまを渡し守是を託致しけれども彼侍ども一向に聞入ぢ渡し守も殆と當惑なし居けるを是を見るより大作は人を押分け中に入りかの三人の侍ひに向ひてヤけるは子細は何か辨まへ申さずいへども相手は女の事なれば何卒に勘辨なし下さるやう願ひ奉るとヤければかの侍ふひのいひけるゝ武士たる者の腰のものを汚し一言の言葉も掛ぢ其儘よ過行んとせしゆへ斯の有様なりといひけれども大作ハそりやは武家様にハ無理のよふ存じハ相手とヤハ高が知れたる女なり夫を兎や角仰ふるゝは近頃以て不實の至り先々ぢ勘辨なさるが肝要なりといひしかも彼侍らひ大ひに怒り汝卑賤風体を致しながら舌長なるヤ方彌々以て了簡ならず先汝から先へ打果さんと三人一時よ刀を扳持大作目がけて切て懸れども此方はしれ者身をかわし打込太刀先事ともせず三人の侍らひを相手にして暫らく挑み戦かふと見へしが大作圍敦三人とも礫打に終に神宮寺の川中へ投込たり彼の三人の侍らひども急流にて泳ぎもならぢして終に水よ溺れ一命を

落しけるさて此侍らひ三人は須賀留の後れ供にて有しとぞ然るに大作ハ天狗の宿り本より此所まで逃のび來り猶又爰にて斯樣かる働らきせしとハ實ゑ大膽不敵の事なりける渡し守の面々も金昆羅參りの手並の程を皆々かんじけるとあり

第五回　大作須賀留を討取事
幷　大作伊達三次面會の事

扨も此時相馬大作は彼女順禮の顏をつく〳〵見れバ是則ち戸坂内記の娘お千代ありけれバ大ひに驚きながら素知らぬ体にて順禮に向ひ申けるは其方も未だ二八の花盛りにてかよわき女の一人旅是には何ぞ樣子も有ふが定て國元には両親も兄弟も有りつらんケ樣の事をバなさぞして早々國元へ立歸り両親に孝を盡すが肝要ありと申けれバかの順禮の思ひけるは何か心有げな言葉の端若や我夫にてはあらざるやと思へと其身は盲目の哀しさは顏さへ自由に見へさればしほ〳〵したる其体に大作猶も力を添重ねていひける樣我等是迄來る道にて神宮寺村といふ所あり此所に高橋市郎右衛門といふ金滿家ありて世上の難澁人を救ふと聞し故其方へ便り行べしと左も懇切に教へしかは順禮は一命を助かりし上何から何まで御深切かゝる御心遣ひに相なりけと大ひに悅び其儘爰を立退ける跡見送りて大作ハ悲歎ぞ涙に暮けるが人目を憚かる忍び泣暫しハ默然たりしが川越どもハ金昆羅參りに向ひ申けるハ時々只今の如き惡侍らひ來り實ゑ困し事なり貴公さして急がぬ旅なればゞ暫り押へにこの砂手に止まつて居て呉る心ハなきやと大勢の者より頼みけれど大作ハ元來泪々の身の上ゑてさして急がぬ事なれど暫しの間此砂手に止まつてよき手づるもあらんかと思ひけれバ早速承知いたしける故川越どもハ力を得て金昆羅〳〵とぞそやしける大作ハ此處にて半年余りも足を止め須賀留の樣子をうかゞひける然るに先頃柳瀨峠天狗の宿り木ゑて狙撃せし須賀留殿ハまさしく鎧の櫃にて全く殿ハ安泰なるよしを聞無念なごのらも空しく日を過しけるゑ爰に又須賀留殿ハ此砂手の渡し場を明日御通行是あるよしの前布令あつて人籍の正敷者を人足に撰ぶべきよしを達し有けれバ大作ハ是を聞て大ひに歡び居けるが渡し守の輩らハ人籍の正敷者を二十人を撰み無籍なれども金昆羅の賴みに依て此壹人を差し加へ都合廿壹人の人足瀬へける偖當日に相成けれバ須賀留殿ハ敷多の士卒を隨へ前を拂ふて砂手の渡し場へとゞ到着有けれバ川越の人足等敷艘の船を勸め就中金昆羅を殿の召船に乘せけれバ大作

ハ悦び勇み此期を外さず討取んと専ら心を配りけるに船ハ既よ神宮寺川の中央に至ると思ひし頃大作ハ此處なりと乗物を守護成ける四五人の侍士を持たる掉よて横あぐりに打けれべ何條以てたまるべきや徒士の者ハ眞逆樣に川へはまるを見向きもせず殿が召たる駕の垂を引放し直樣殿を小脇にかひ込川へざんぶと飛込たり外の船より此有さまを見たる士卒ども大ひに驚きすハ一大事と狼狽し曲者遁すな召捕と口々に呼わりけれども名負此川ハ頗ふる急流にして其源ハ坂東太郎かなかれ落る事なれべ中々容易に飛込者もなく只船を漕付て水の中をば毛鎗竹竿を以て捜るのみにて知れべきやうもあかりける此時に大作ハ殿を水中にて刺殺し其身ハ川中に泳ぎ行き水中より頭を上て當邊を見れべ人壹人も居らざれハ陸よ上りて衣物を絞りてある農家を頼み米を少々買求め是を喰し其儘此場を落延て何國ともなく立去りける偖も相馬大作ハ夫より鰐の銀山一の嶮といふ所の項上に登り此所よ非人小家を建て徳利よて酒を焚須賀留の樣子を伺がひ居るにある日麓の方より侠客やうの者三人登り來りて親分と思しき者に二人の子分らしき者話しを致しけるやうハ如何に親分此上の項上に待伏して首よく奴とばらしてハ仕舞なさるべし及ばぢながら我々も助勢致すべしと

相談をしながら登り來りて大作の傍近く來て田葉粉の火を一吸貸呉よと手に〳〵煙管を取出しける故大作は火を進ぜべしと手元ゟ有ける芝を燃してサア〳〵ゟあがりなさるべしといひしかゞ銘々に煙草を呑けるゟかの親分体の人と大作と顔見合し互ひに樣子有氣に目くばせしてゞうつむき居たりける時此親分体の者二人の子分に向ひいひけるゝ手前等両人先へ行て是へ戻るか窺ひ呉よといひけれゞ子分の両人承知致したりと其儘先立到りける跡ゟ殘りし親分ゝ大作が前に進みより身をへり下りてゆけるゝ是ゝ〳〵尾崎樣よふこそゟ無事て先ゝ目出度いなり貴君ゝ未だゟ主の爲にゟ苦勞遊ばされい事誠ゟ感じ入いなりとゆけれゞ大作ゝ是を見るに思ひ掛けなき伊達三次なりけれゞゟ邊も無事にて口出たしと互ひに思ひぬ對面ゟ悦びあるゝ道理なり伊達三次のゆけるゝ先頃柳瀬峠にて須賀留殿を打絲ひしも正しく替玉にて有し由然れども其ゟ心痛の程我等陰ながら案じ罷り居しが只今壯健のゟ姿を見る事の嬉しさよと落涙をして悦びけれゞ大作も俱に落涙を催しける偖大作のいひけるは併しゟ身は何故に此所へは來られしやと尋ねけるに三次のゆけるやうは先頃江戸芝札の辻にてゟ別れゆてより江戸表にて千葉周作といふ劍道者の門人とおつて長らくの間修行致し居りしに此間國元より我を呼寄せの書狀到來せしゆへ早速歸國致し樣子を問へゞ此度我父三右衛門英太の金子を勝けるを景清の源太といふ者是を憎み父三右衛門の歸る所を待伏して殺害せしなりと聞て悔り其敵を討んと存じ桑折の驛に有て樣子を伺がふ處に彼の源太といへる奴今日阿古屋腰掛松ゑ行歸る道は此山を通る由を聞し故此所に待伏して討取べき手筈なりと子細を委しく物語けれゞ大作も氣の毒に思ひ扨々夫ゟ心勞なるべし我等も俱々助勢致すべしと此話しに暫らく時をぞ移しける

第六回　伊達三次景清源太を討事
幷綱五郎土塲へ立寄事

斯る所へ二人の子分立かへり只今景清源太此處へ來るなりと注進致しけれゞ三次ゝ大義なりといひなゞら腕の佐吉と鳶の熊五郎の三人ゝ木蔭に各其身を忍びつゝ今や遲しと相待ける斯とゝ知ぜ景清源太ゝ青鬼の清吉阿古屋の松其外に二人の子分を引連山の手邊より頂上さして登り來る待設けたる三人の荒もの木蔭より飛んで出三次ゝ源太に打向ひ父三右衛門か敵怦三次ゞの向ふたり思ひ知れよといふ儘ゟ刀を拔て切付る源太ゝ不意の拔打に膽を潰

し周章ふためきながらも流石に我慢不敵の者どもなれば負す劣らず切結ぶ傍への小家に大作に此休を見て居たりしに三次に源太と渡り合腕の佐吉に青鬼清吉と鏢を削る鳶の熊五郎に阿古屋の松と斬結ぶ然るに源太の子分外二人の者に手明あれば動もすれば三次の後ろへ廻り切付んとする有様なれば大作は是を見兼て飛んで出二人の子分を追ひ散す此隙に三次は難なく源太の肩先より脇板かけて切下ければ何條以てたまるべき虚空を掴んで相果ける此有様を見るよりも清吉松の両人はかんじんの親分を打果され何を目當に爭そわんやと放々の体にて逃失たり三人の者大ひに歡び勇みけり扨も三次は非人に向ひいひける様手前もよくこそ加勢を致し呉たり此様なる物淋しひ山中に居るよりも寧そ我等が宅へ來りなば飯や肴の殘りものは多分あるから先〳〵我等が住家迄來るべしと云しかゝかの非人大ひに悦び左やうならば親分御厄介に相成るべしと是より三人の者非人を同道して桑折の驛へ歸りける偖も伊達の三次は相馬大作を表向は非人と見せ掛け万事に心を配り隱慝ける時に其捕を逃延たる清吉松の両人が源太が宅に歸りて此事を女房に語りければ女房大ひに歎息していひけるは手前も親分と同道して居ながら親分の殺さるゝを見捨て歸るとは余り不人情なる致し方なりと怒りければ二人の子分は其言わけに困りける女房は斯ては果じと我兄たる梁川の驛より目明しの張本疊や直右衛門に頼み何卒夫源太の敵を討て下さるべしと頼みしかば直右衛門のいひけるは元來源太の非道を行なひ罪あさ三右衛門を暗討にせしゆへに斯る騒動の出來せり此義は打捨置べしと一向取敢されども妹は押て此義を頼みけるゆへ流石は兄と妹の間柄ゆへ詮方なくも然らば討て取そべしと請かひける然に此直右衛門は自分の子分三百人源太が子分百人あり都合四百人の同勢にて日限を定め桑折驛なる伊達三次が方へ押寄べきの結構なり此時早くも三次方へ聞へければ三次の方にも夫〳〵に子分をあつめ土俵を疊を以て專ら防禦の手當嚴重なる怠りなく構へける爰は又關東の三侠客の一人此頃關東の三侠客といふは國定忠治大目　此中信州の住人信夫の常吉此大喧嘩を聞傳へ直様馳來り坂の榮五郎信夫常此三人を言　双方の挨拶を致し先〳〵無難に事を治めける其中直りとあつて阿古屋腰掛松にて花會をひらきけるが此事を聞よりも近郷近在より我も〳〵と見物に來る者夥く爰は又三盃の驛に井筒屋清兵衛といふ造り醤油屋あり此家の印は丸に田の字の印にて多く江戸積を盛大に致しける然るに此家の番頭に綱五郎といふ者あり今日得意先の懸を集めて戻り來る其風

俗い奥垣の着物に小倉の帯をしめ白足袋に滑革の雪踏をはき腰に矢立帳面杯を提げ財布を肩にかけ靜〳〵と歩ゆみ來り又其方より來かゝる者い同し家に出入する仲仕頭の源吉といふ者おりしが互ひに顔を見合して是い〳〵綱五郎様何國へ御出なされしやと尋ねけるに綱五郎も是は源吉殿我等い只今懸を集めて歸る所なりといひければ左やうにていやと然し貫方の肩に乘せてある財布い大分重ひやうで御座りまそといひければ否〳〵謎かに三百兩ばかりなりと答へけれゝ源吉い憫れ果ていひけるい貴方いたゞいま井筒屋のお嬢さまと御入魂に入らつしやるから三百兩や四百兩の金い自由になさるゆへ謎かに三百兩で御座ませうなど、いやみたら〳〵、云散し時に綱五郎さま今日い阿古屋腰掛松に花會か御座りまそが御見物い如何にいやと進めければ綱五郎い生花の會なりと思ひしゆへ左あらば連立ヤべしと二人い向道して阿古屋腰掛松迄來て見れば數多の見物山の如く綱五郎い奇遇を爭ム花會なれゝ案に相違し立歸らんと致しけるを源吉い思ふ子細もありしにや無理に引止めヤけるゝ折角妥迄來りて歸らんとい余りに其意を得ぬ先々五六番の勝負を御覽なさるべしといひけるに綱五郎も元來此道い好なれども此節思ひ切て一向に手出しもせざりけれども今源吉の

勸めに依て是非なく見物致し居けるゞ向ふの場所を見渡せば數多の俠客居並て中にも一際目立て信夫の常吉ゞの居たりし場所と見へ幅八丈の大蒲團を敷あり又右手の方にい伊達三次ゞ座を構へ左の方にい疊屋直右衛門が座を構へたり其外子分一統連列りて座しにける又三十人の者ども車座に圍居し奇よ偉よと勝負さゐ中なりしかば綱五郎に息渡と手出しい如何にいやと勸めければ綱五郎此時迄い慎み居たれ共素より好の道心の移りし折なれいかにも承知と肩なる財布を取て投出そと是を皆詠めるに素人の事なれば聲を揃全体此金い何程有やと尋ねしかば綱五郎のいひけるい多分の事でいなし謎かに三百両ゞかりなりといひしかば並居る人〳〵此奴大分に膽の太き奴かおよき鳥が掛りしと口にい出てねど各目顔で知らせ合何か勝負の事に付き聊か言葉のゆいかけよりついにけんかとなりけるを右手の俠客い如何致そやと三次の顔を打詠笑を含みてひか〳〵居る又三次も彼の素人の者い如何爲やと互ひに笑ひ顔をおして居たりけり

第七回　綱五郎青鬼の片腕を切事
并綱五郎井筒屋を退く事

扨も勝負場の惡習として偶々素人の立入とさい種々樣々之手段を搆へ勝負を瞞着して囊中の金を掠取い此徒の仕來なれい今日しも綱五郎が勝利に成しを狂て其金を奪いんとせしより綱五郎勃然て云けるい如何に壺屋是い君の引證が耳の垢を浚て能聞べし頃い寛治乃年間陸國に安部の貞任宗任兄弟の両人謀叛を起し八幡太郎義家其父頼義の両將の爲に戰かひ破れ弟の宗任い都に引れけるに衆卿陸奥い片鄙なる故に梅の花も知るまじと宗任に恥辱を與へんものと梅の一枝を持來り此花い何といふ花なるやと問けるに宗任の卽答に

我か朝で梅の花とい聞つれど大宮人いいかゞいふらむ

斯のごとく詠しけれバ公卿方かへつて恥を請し事ありとか我等勝負之事いしらされとも何ぞ一二をわきまへざわんや素人を思ひあなどりて能くこそ人を馬鹿にせしやと云つゝも一刀を扨放して青鬼清吉が片腕を水も留らぬ切落しけれバ有合人〳〵大ひに驚き膽を潰して騒ぎ立扨た〳〵と段〳〵に彼の奴と打やぶち延せと土塲の下に隱し置たる棒追取綱五郎目掛て打んとそるを綱五郎るとも せぬ尻を据て胡座をかきを、打る、者なら打て見よと恟ともなさぬ器量の若者勇士敷社見へにける此時伊達の三次大音にていひけるい其の客人と打

バ打よ此三次が相手だから來れ小わつぱどもと立上れバ直右衛門の子分の者ども相手い三次と有からい面白き事なり打よ〳〵と動亂そ此時奥の一間に居たる信夫の常吉此物音に馳來り事の起りを尋ねけれバ全く青鬼の清吉が非法の由にてありけれバ又もや常吉の中人にて事を無事に治めけるが先綱五郎い三百兩の金子を元の財布に納め源吉と同道にて靜〳〵と立歸りける是よりして綱五郎の評判高くなり青鬼清吉の片腕を切たるより人呼で羅生門の綱五郎とぞ言讃しけるまた三盥の驛なる造り醬油や井筒屋清兵衛の女房おわくといふい此家の内娘にて清兵衛い娘れ國を連子して此家へ養子に入込し身なれバ女房おわくい何につけ我ま、の氣臨をおこしけるが自分の先夫の子に國五郎といふ者あり是とれ國と女夫にあさんと思ひしが此程より綱五郎とお國といどふやら割なき中と察しけれバ綱五郎を追出さんと思ひ居しに此頃綱五郎の噂さ高く羅生門といふ異名を取し事を小耳に狹みし故何日い其實事を探んと心と煩わせけるにある日下女に申付仲仕頭の源吉が宅に遣わし此頃夜分甚だ物騒なる故誰ぞ丈夫なる者を一人泊り番よ遣わし呉べしと申けるよ此節仮令何程物騒にもせよ又用心悪くとも井筒屋の内に於てい一切心配なし然も羅生門と云んとせしが

口を閉おつといふまいと何氣なく左樣ならば今晩より泊り番を遣わしやへしとやに付下女の宅に歸りて源吉さんが羅生門といふ者が有から大丈夫なりとやされしと告げれば偖はおわくの直樣源吉を宅へ招きてやけるの唯今其方が宅へ下女を遣わし泊りばんの事を頼みしとき井筒屋にの羅生門が居るから氣遣ひないといふたそうだが全体私が内よて羅生門と云の誰の事なるやと尋ねけるに源吉の中〳〵左樣な事のやさずといひければおわくのいひけるの其方の包み隠しを致せしなり此事をいわんに於ての今日よりわしが方へと出入の差留やべしといわれて源吉たまりかね實の其羅生門とやの當家の番頭綱五郎樣なりと語りけれべおわくの此事を清兵衛に告悪行を働らき綱五郎を早々追出して御仕舞なさる可と無理に突込けるが清兵衛の此事を早くも知り居たれどもおわくの耳に入るまでのと包み居たりしに今斯云ひ出されて詮術なく清兵衛の綱五郎を一間に招きやけるの其方事永〳〵の間我家に在勤を致し呉し事實に悦ば敷存ぜるなり然るに女房れわく不斗した事より其方の所業悪敷を云立追拂ふべきとやせとも我の固より其方を何やでも置たく思ひけれども女房おわくの家女にて我の養子の身の上なれば何に付ても云壓れ心外にの思へども詮方なく依て其方

一度當家を退ぞき呉べし是の少しの金子なれども道中の旅用となし呉べしと金子三十両を差出しけれべ綱五郎やけるの御心遣ひの程有がたくれへども我等首尾よく御奉公致せしなれば此金子を頂戴仕りいらへども悪行を行ひし此綱五郎一錢の金たよ頂戴致そべきゆわれ是なくいと差戻しければ清兵衛は大ひよ感じ左あらを是の持返り呉よとて一つの箱を取出し綱五郎の前よ差置を何品成やと綱五郎蓋を明て是見れべこの如何に根からぶつゝりと切たる嶋田髷是はと驚ろく綱五郎清兵衛重ねて云けるは髪は生もの身は大事娘の心を察して往末永く添遂呉かしと流と涙も子を思ふ親の恩愛左も有べし流石に猛き綱五郎も暫し泪に呉れけるが清兵衛よ向ひてやけるはこの有かたき御心遣ひ我も一旦御嬢樣と御目を忍ひ不義の契を結しからの此綱五郎の存命中は何をか以て見捨やる可やと云かべ清兵衛は大に歡び互ひに盡せぬ別れをなし綱五郎はかの桐の箱を携て其儘井筒屋方を立退けるが心ざそ其所は桑折驛なる伊達の三次を尋ねんと五六丁來るとき後の方より呼聲に振返り見れべ仲仕頭の源吉が一目さんに馳來り綱五郎が袂に縋り此度私しが口走りしより罪なき貴方を斯樣なる目に逢し何ともやう譯なし何卒御勘辨下さるべしと泪を流して詫けれべ綱五郎は否〳〵

何も手前の仕業よあらぬ全く我が悪行より起りし事決して人を恨みやさぬ金子五両を取出し其の方是迄我等を種々氣を付て呉た故少しなれども是を進ぜべしといひけれべ否〳〵是は勿体なし貴方は旅の御身故何程有ても入るものなり御心遣ひは御無用と押返せバ綱五郎我ら五両や十両の金には不自由致さぬ是非〳〵納め置べしと無理に金子を源吉にあたへ桑折の驛へと急ぎ行ける

第八回　井筒屋家内騒動の事

扨も羅生門の綱五郎は伊達三次を尋ねんと桑折の驛まで來りけるに流石俠客の事あれバ直に有家も分りし故綱五郎先桑内を乞ひ三次に面會してやけるは我等過日阿古屋腰掛松にて初めて親分に面會致し貴君の倭魂しを慕ひて日夜忘れぬ冀くは親分の子分になし下さらべ此上もなき仕合なりと餘儀なく頼みけれは三次のやよふ是は〳〵綱五郎殿には何をやさるや我等より遙よ氣前の勝りし貴殿中々子分ごとはぬ存じもよら事なりと斷りけれバ綱五郎是非おくして左あらバ兄弟分の誓を結び給へかしと頼みける故三次は最早や斷わるに術なく左あらバ御存意に任せ兄弟分の盃を致すべしと子分よやり付酒肴用意を致させ奥の座

敷よて互ひよ盃を献酬なし子分にも以後綱五郎と入魂に相成べしと堅くいひ聞せ自分は兄弟と成て暫し酒宴を催しける早酒も闌なわとなりし時三次は相馬大作の人相書をとり出し綱五郎か前に置やけるは此書姿は此程より噂さの高ひ相馬大作といわるゝ者の人相書なり此者を召捕へ御上へ差出しなば貳百両の褒美金を給はり其上貳百石の侍らひに召抱へるとの事なるが何と綱五郎一番此者を召捕能手柄に有付度思ひしが手前は如何思ふやと尋ねけるよ綱五郎大よ呆惘果顔色變じて云けるやう此綱五郎の目が眏んで有たりしや此樣な小心不義の三次とは知らずして見損ひたり夫に兄弟分抔とは馬鹿〳〵敷と悪口を罵り此樣なる處に長居は無用なりと立出んとするを三次聲を掛けて綱五郎暫らく待べし其心底を見る上は打解て手前に話しをあり先々立歸るべしと引留子分の者を遠ざけ時に綱五郎足下は此相馬大作を斯まて思ひ居るかといへは綱五郎やゝ樣侍らひたる者は君に忠を盡し義を全とふするを以つて主とする此大作抔は主家の爲に一命を投うち粉骨碎身の勞を盡す是忠臣兼備の英士といふべし我ら身不肖なれども斯樣なる人の爲に命を的にして一番助勢をしたしと勇敢き其言葉よ三次大ひに感じ入手前か斯る心底なれバ唯今一大事を明すべし實は我家は

相馬大作隱慝有然れ共手前の心を探らん爲斯はやせしなりと有の儘に物語りければ綱五郎さては左樣にて有けるや我等いさゝか助力を致すべしと言葉の下に唐紙引明入來る大作は綱五郎の前に進寄やけるは未だ一度の對面もせざる足下の斯迄我を思ひ下さゝ段身に取ていか計りか辱なく存するありと大ひに悅びける綱五郎偖は音に聞し相馬大作樣は貴殿にて有けるや此上なごら御入魂下さるへしと有ければ大作大ひに打解三人とも終日酒宴致しける爰に又井筒屋清兵衛の女房おわくは江戸表より急用なりと清兵衛と欺き出し扨其跡にて國五郎とおくにと祝言をさせんものと若ひ者喜助と云者に金子を與へ主じ清兵衛を途中にて殺し呉べしと賴み遣わしけるゆへ喜助ハ清兵衛に追付んとて道を急きて行けるが八町畔の松並といふ所にて出逢物をもいわせ切て掛へるを清兵衛ハ大ひに驚ろき逃延んと致しけるを此方ハ透さず引捕へ今や打殺さんとそろ所へ通りかゝりし伊達の三次かの惡者を取て投捨提緒にて引括り清兵衛を救ひて惡ものを責上げければ是全く井筒屋の若ひ者喜助にて有ければ清兵衛ハ驚ろき惘れ果てゞ居たりける三次ハ猶も責上げ何者に賴まれて斯る惡事を爲すやと尋ねられ喜助ハ苦しさに堪かねおわくがいひ付にて猶主たる密夫をなし藏預りの松

兵衛を内へ引込國五郎とおくにの祝言をさせ事迄て惡く白狀致しけるゆへ伊達三次ハ先清兵衛を始め惡者喜助を我家に連れ歸りて井筒屋の樣子如何と親ひける扨も井筒屋に於てハおくにと國五郎をゝ婚姻させんとて彌々其日に相成けれゝ料理拵らへハ出入の肴屋に申付婚禮の用意を調のへ又國五郎ハ入湯をおし下女三人にて據袋にて惣體を磨立なしけれゝも何分國五郎の顏ハ金物やといふ額付にて眉毛ハ鉄さふ目ハ眞鍮鼻ハ獅子口ハ鰐口齒ハ出齒なり下女ハ國五郎をいろ〳〵をだてそやしける又仲仕頭の源吉ハ井筒屋方にて婚姻の次第を逐一綱五郎へ注進なしけれゝ綱五郎此趣きを三次清兵衛に語りけれゝ取分清兵衛大ひに怒り居りしに井筒屋方にハおわく娘お國を一間にまねき國五郎と婚姻の事を申聞しける中はや料理もとゝのひ鳩臺式の銚りもの美々敷並べ立けれゝお國ハ驚き涙くみて申けるハ此事父上ハ御承知にてしゐや假令又左樣にもせよ父上の留主の間に此樣なる事をなしてハ如何ある御怒りの有も計りがたし何卒父上御歸宅にて御計らひ下さるべしと申せしかゝわくのいふやう清兵衛どの、承知なしに此よふの事が出來るものか其樣な事を案じすとも早々祝言致すべしといやがる者をゝ無理に引居すでに盃を取替せんとする所へ下女持來り

たる祝ひの進物何方よりとも下に名當いなく何品ならんと開き見れゞ是い如何に桐の箱にて中なる物い鴫田の髢おびくい不思儀に思ひ何人か此品物を持來りしぞと尋ねけるに一間の中ゑ壁有てヤア其進物わ我よりありと間の唐紙押分て入來る綱五郎其進物の代りとして其方の白髪首を入べしといひければおわくい大にいかり誰かと思へゞ其方い番頭の綱五郎なるや唯今の惡口雜言扨い其方主を殺す氣なるやといひければ綱五郎成程手前を殺すのだ番頭の綱五郎抔とい片腹痛し此家ゑ奉公して居る時い主ともいわん又奥樣ともいわん今斯暇を取て出た曉い主でもなし家來にもあらぞ余りゑ口廣き事をはざくべからぞ全体我い惱太き事を致す奴なり此綱五郎が成敗を思ひ知れよとおわくの髻引掴み引ぞり廻して横面をはつしと斗りに打叩き今や捻首にも爲んとせし折柄先綱五郎早まるかと入來る伊達三次主人の清兵衛両人を見るよりおわくは仰天なし惘れ果てゞ居たりける三次おわくに打向ひ其方は道ならぬ事を働らく奴なり現在に夫の有身の上なるに密夫をなしける事言語同斷不埒の至りなりと白眼付ければおわくは其樣なる事身に取て聊か覺へは是なしといへば三次は其方いか程包み隱すとも最早叶わぞ又其上に清兵衛殿を人を頼んで殺さんとせし事皆々

明白ゑ相知れたりきり〳〵白狀をなすべしと責立れと强情の深き邪智女も（中々一應にて白狀を致さぬゆへヤア〳〵其繩付を是へ引べしと呼わりけれゞ子分の佐吉心得たりと藏預りの若ひ者喜助をゞ引ぞり出して是にても其方覺へなきやと責付られ最早包み隱そとも両人が出たからは通れぞとや思ひけん事の顚末を一々ゑ白狀致しければ清兵衛はおわくに向ひ其方の命を取べき奴なれども格別の情を以て命は助け取すべしといひ又松兵衛始め喜助も重〳〵の惡行なれども是又情を加へ命を助くべし早〳〵此家を立去るべしといひながら重ねておわくに申けるは國五郎には當家の相續を致さすべしと情ある斗らひゑ三次を始め綱五郎も俱に清兵衛の慈悲を感じける既三人は罪人のごとく尻を打たれて追出され放〳〵の体にて立出ける跡ゑ清兵衛國五郎を呼寄其方は當家の跡續致さすへし又おくには綱五郎と不義せしゆへ是は勘當申付べしと塵も浊さぬ取扱きに皆〳〵是を感んじける偖もお國は勘當を受返つて其身の仕合せなりと思ひ戀れし綱五郎と世間晒ての夫となり十三荷の荷物をとゝのへ雲助哥にて豪折の驛へと緣付きにけるゞ三次の内にも女夫連れは嵩高なりけれは其近邊ゑて一軒の家を借り受是へ女夫を移しけり

第九回　お千代砂手にて艱難の事

爰に又相馬大作の女房お千代は砂手の渡し場より一里半ヨりも來りしに砂手といふ驛あり今宵は此處よて一宿せんと小泉屋源次といふ宿に泊りけるが此家の主人源次の思ひけるよふ今日我宿へ泊りし盲目の瞎聽はそこぶる美人なり彼の女の眼を療治して遣わし全快の上能金の手蔓にも有付んものと思ひしかばお千代を手厚く深切に饗應しある日お千代よ向ひいひけるは此隣家に能目醫者ありを前の眼も生れ付ての盲目とも思われぞ彼の醫者に憑つて見る氣は無やと尋ねしかばお千代は大ひに悅び其樣なる能きお醫者の有ければ何卒お世話を賴みヲべしと有し故へ源次は直よ此醫者を迎ひ心を盡して看病しけるよ流石よ澁澤したる眼なれば凡三十日ヨりにして眼病遂がに平癒しけれべお千代ハ此上も無く悅び源次に厚く謝し夫より五六日も打過ある日源次に向ひ誠に永〳〵の御厄介に相成りいひしが今日ハ出立致し度存し候故へ一先づ御勘定下さるべしとヲ付失〳〵に事相濟けるゆへ源次のいひけるハ今日ハ初立の事なれば我等道迄でも送り進ぜべしと有けれべお千代ハ色々是までの深切に預りし上勿躰なしと辭退それども源次ハ強ひて送るといふ故へ詮方なく同道して砂手の奥山に至りけれべ源次ハ爰ぞと人の通行なきを幸ひお千代をとらへ無理無躰に強姦せんとなしけるゆへお千代ハ大ひに駭ろき逃んとそれども源次ハ放さぞしつかと捕へ其儘お千代を押倒し既に淫に及んとせしかべお千代ハ一生懸命よて大聲を上げ人殺し〳〵と呼叫ぶ源次ハ搆わぞ此奥山へ誰が來るものかと乘掛らんとそる所へ北の方より綱代の駕を舁きて登り來り雲助ハ此躰を見るより駕に乘りたる者にいひけるハ親分合点で御座るかと駕を下しけれべ中より出たる一人の出家物をもいハす源次が首筋引掴み迦ぐと見へしがとつかと投付其儘源次の衣類を剝取赤裸にして蔓を以て松の木に縛り置其駕よお千代を乘南を指して舁て行跡に殘りし小泉屋源次ハ人殺しなり〳〵とわなり立けるに爰よ又一人の俠客体の者此所を通り掛て扨ハ山賊の類族人を惱すならん助け呉れんと馳來つて是を見るに一人の男松の木に縛らて居りけれべ先蔓を解遣わし其樣子を尋ぬるに源次ヲけるハ私しハ旅の者にて此山を通行致せし所山賊の爲金子を取られ剩さへお千代といふ私しが妹を勾引かされ斯の通りの仕合なりと實らしく言葉を工みに述けれべ彼の俠客いひけるハして其曲者ハ何國へ行しやと尋づねけるに唯今南を指して行しとヲける故左あらべ其妹を取り返

し遁わを間我らに付て來可と跡を慕ふて追懸行に彼の出家お千代を山の林に連れ行兩人の駕舁に手足を持せ己れハお千代の上に跨り今や强淫せんとの有さまを遙かに見て取彼俠客一目さんにかけ來り矢庭ゑ出家を引退けて一刀を拔切かけ、れべ僧も同じく拔放し受つ流しつ切ぴすぶ此方ハ源次と二人の駕舁爰を先途と打合けるお千代ハ又も此人惡人なる誰斗り難く思ひしゆへ此騷ぎの隙を伺がひ元の砂手の驛へと逃て行此時彼の俠客の太刀や增りけん終に出家を切殺し谷間へ蹴落しけるゑ又源次ハ駕舁二人を打倒し互ひにはつと一息突俠客のいひけるハ手前の妹が居らぬといひけれべ源次ハ氣が付是そも如何にお千代をべ逃せしと先俠客ゑ一禮を述べ私しハ是より妹を尋ね候故是にて御別ヤべしとて双方ハ南と北とへ別れ行く扨も源次ハお千代の行衛を尋ねんとて先砂手の驛へ立歸りて方々を尋ね聞しゑ其女ハ慥に大黑屋藤兵衛方に泊り玄と聞源次ハ大ゑ悅ひ大黑屋方指して至りける

斯てお千代ハ砂手の驛に逃歸り來りて先大黑屋藤兵衛に奥山にて難ゑ逢し事と逐一に語りけれべ藤兵衛ヤける樣夫ハ定めて御難義成れしならん併し我等が方にて御泊り有べ左樣なる氣遣ひハ一切是無しと力を添へお千代をべ雜用部家へ案内を致しける然るゑ小泉屋源次も亦當家にて一泊を乞下女の案内ゑて二階に通り暫らく有て入湯に行戻り掛に彼のお千代當家にて何れの間ゑ居るやと間每〳〵を見て歩行しゑ不斗一間を差覗き見るにお千代ハ當家の亭主に二百両の金子を預け居りし所を源次瞥と見留たれども素しらぬ振にて其儘我間に立歸り暫らく有て藤兵衛が帳場へ居傍らゑ出來り源次いひけるハ如何に三ヶ月藤兵衛久し振だなと聲を懸れべ藤兵衛ハ是ハ〳〵源次じやなひか何用有て我家ゑハ來りたぞと尋けるに源次のいふよふ手前今日ハ味ひ仕事をしたなといふに藤兵衛ハ眞化面にて味ひ事とハ全体何の事なるやと云けれべ源次のいふやう知らぬと思ふか今一間の中にて女順禮より金子貳百兩を預かつたであろふがなあの順禮ハ我ら三十日も前より色〳〵と手を盡し能仕事にせんと思ひ今日順禮が出立を迄り奥山ゑて仕事にせんと致せし所山賊どもに防げられ彼女と取逃したり依て此金は已にも分口をして二ッ山にして呉べしといひければ藤兵衛の思ひけるハ惡ひ奴に見付られしなり手前ゑ見付られては地獄に併だ滅多見逃す事ではないから如何にも分口は致すなり併し其方ゑ一ッの賴み有り余の義に非ず今雪夜更なば彼順禮の寐間へ忍び込刺殺し呉べし左も無時は我等の惡事

の顯はる丶也不便乍も順禮を手に掛け死骸をば奥庭の飛石の下へ埋め置跡の厄介ならざる樣致し双方案心して其上よて百兩の分口を手渡し致すべしといひければ源次は尤もなりと早速是を承知して二階に上り夜の更を待居たりける

第拾回　喜三郎國定お千代と名乘逢ふ事

幷　三ケ月藤兵衛發心の事

扨も此家のあるじ藤兵衛は下女のおよしを呼て彼貳百兩の金を預け偖云樣是およしやこゥ大概にて我が心に聞がふてもよかりそふなものじやなひかと云しにお由のヤけるは貴方は當家の新旦那の事故ヤ〳〵名みはヤさねど若旦那の藤太郎樣私しをばいろ〳〵御口說なさる故誠に迷惑を致しける上又〳〵貴方さま左樣に仰せられて至極ヒりヤべし此事計りは御勘辨下され度しといひければ藤兵衛は悋位ひの云事を頓着せぜ我しが心に聞がふべしといろ〳〵と口說にぞおよしは此主をば訊らんものと思ひ居しかば此時漸〳〵承知して左あらば今爲寛〳〵と御話しおヤべし併し旦那樣先程私しは立聞をして居りましたら源次樣とやらよ金の分口をなさる樣子弼〳〵誠になさるかと尋ねに藤兵衛相手は名うての源次なりよ

もや取ぞには酒すまじといひければおよしやけるは旦那は大分淺智恵なり金子をば渡さぞとも能事あり私しは夫小判を貳百兩計所持して居り升れば源次の分口の時預り置しは此金なりといふて御渡しなされたら夫にて事を濟やべしと惡知恵を教ければ藤兵衛は樣手を打大に感じなる程夫は宜べしと是に附ひ質の金子と戎小判と掩碧帳箱筒の中へ隱し置所へ怖藤太郎外より立歸りておよしをば一間へ招ていひけるは手前は何で我ゑ氣を揆するのだ早く好き返事をして膚くべしといひければ私しは否みはやさねども雜旦那が兎や角と被仰るゆへ今迄好返事もせさりしが今雪和寛〳〵御詞しや故夜中頃には私しが居間の鄰用部家まで忍ひて來て下さるべしと紙を極めて別れける扨もおよしは用事を取片付樣先に立出ければ壹人の男羽りておよしに向ひ手前は餘程長く待せたり一体何をして居たりしぞといひければ是は〳〵金太さん紙束の金子よりは少し多ひが貳百兩斗り出來たりと渡しければ金太は驚き是は〳〵多分なる金如何してか拵らへしやと尋ねければ先程當家の主人藤兵衛どの順序の金を預り宜仕事をせしを私しは又た戎小判と替させて樣取をせしなりと語りければ金太は先金子をば懐中なしおよし用意をせよといひければ先衣物を着替箱筒を引さらへ屋

呂敷に包み込其位取たれば跡には衣類一ッもなしと風呂敷包をばかしくの金太に背負せて裏の切戸口より抜出しが又およしのいひけるに是金太さん毒を喰ば皿迄と迚もの次手にも ふ貳百両斗の仕事は風來ついて有けるゆゑ是も一所に致したらば如何なりといふに金太は耳を密せ其仕事はいかなる事ぞや夫は外でもなひが今日當家へ泊り込たる女順禮器量は十人並に勝れ玄美人今雪源次といふ女が殺す事は必定なり當人に右の譯とばいひ聞せ助ける を名として彼女を誘き出し何れへなりとも賣代なさば貳百両位ひには大丈夫の價ありといふに金太は然らば手前程能く引らひ見るべしといひしが直におよしは取て返し雜用部家より到りお千代と逢てやけるは如何に御女中樣あなたは何も御存じなけれども當家の亭主藤兵衛とやは大盗賊よてあなたさまを奥山よて强淫せんとせし手古良の源次といひ合せ貳百両の金を取んとて今宵夜中を相圖よて此部家へ忍び入刺殺さんとの工みなれバ疾く〳〵此場を浴兒綿へと知らせけるにお千代は大ひに驚き然らば何分能よふに賴みやべしと有ければ私しとても此家を立退候ゆへ御同道を致すべしと十分に欺むき連立て裏口より逃出しける此時かしくの金太お千代の風俗面影を見てつく〳〵と思ひけるハ此順禮人品といひ器量とい

ひ此樣なる女をべ一夜なりとも抱寐せべ此身の本望なりまたおよしハ女に似合ぬ惡徒にて今我れ若年にて殊にかしくの金太とまで異名を取し男振のよさもへに間夫とハなしけれども我又年老て風俗の衰へたる其時ハ又々外にて男を拵らへ我を打果さんも計り難し此樣な劔呑なる女と添ふよりいつその事よおよしを殺この順禮を女房にせんと自分勝手の道理と付たちまちに心を變じおよしの後ろに立廻り手拭にて既に首を絞んとなしける故およしハ驚きもがき叫ぶ此時お千代ハ我命の恩人なりと思ひしかべをよしをべ助けんと爭ひけるよ此時一人の俠客体の男出來り今日ハ女の泣聲の流行日なり見捨て行も本意ならぜと先金太をべ引捕へおよしを助け事の子細を尋ぬるに二人の者ハ身に暗き事の山〳〵あれべ一向に譯も語らず又風呂敷包みなど有ゆへに怪敷思ひいろ〳〵拷問よ及びけれべ流石女の事ゆへよおよしハ金太が心替りせし事より風呂敷包みハ盜み取し衣類にて又此女中ハ勾欄さんとて誘き出せし譯柄又金太の懷中に貳百兩といふ金子あり是ハ此女中大黒屋藤兵衛といふ宿の亭主よ預けられしを藤兵衛ハ是を奪ひ取んとせしを猶又我ら横取せしなりと初めよりのしざらを遺ちもなく白狀致しけれべお千代は大ひに惘れ果けるかの俠客は憎き二人の振舞

かなと先貳百兩の金を取戻し是をべお千代ゑ返しやり縄付の二人をべ問屋場役人に預けける此時お千代かの俠客に向ひ今日計らずも砂手の奥山まてあなた樣の御蔭にて命を助かりいま又この難を御救ひ下されゝ段誠に御禮のヤよふも是なしとて大ひに是を謝しけれべ俠客は順禮に向ひ全体そなたは何國の者なるやと尋ねしにお千代は心打解て斯大恩に相なる上は何をか以て包み隱さん私しは生國江戸表にて戸坂内記とヤ者の娘にて夫と頼みし御方は此節嚴敷御配府の廻つたる相馬大作本名は尾崎秀之助といふ者なりと語けれは俠客は大ひにおどろき扨はそなたは相馬大作殿の御妻女にて有けるか我は則ち其大作殿と兄弟の因みを結び兄上と尊敬したる御方なり斯ヤ我は國定の喜三郎といふものなりと物語りけれべお千代は是を聞て大ひに悦び力を得しと勇みけるさて又大黒屋藤兵衛方に於てハ悴藤太郎よき時分なりと夜半とおぼしき頃雜用部屋へ忍び來りて寐所を探り見れべ闇がりなれども蒲團を出たる跡の明て有けれべ藤太郎の思ひけるよふおよしハ今便所にでも行たりと見へたり戻るまで狸寐をして居しなれべ歸り來りて蒲團をべ捲て見るハ必定なり我が忍び來りしと思ひて我が尻をべ捻り又ハ脇の下をべ擽るを空嘸して嬲も又樂しみなりと一人り言を

いひつゝ、狸寐入をして居たる所へ二階より手古良の源次扳足にて密かに雜用部屋へ忍び入一刀を拔放し蒲團を捲らんとせしに藤太郎可笑さをこらへ扨こりおよしの歸りしなりと空嘯して居る所を源次ゝ一刀の下に藤太郎が咽笛を難なく差通しければ何條以てたまるべき虛空を掴んで相果ける源次ゝ血のたる刀をぬぐひ鞘に納め死骸をふとんゑ卷付て疊の下に入置すぐ樣臺所へ駈來り首尾よく打果したる事を藤兵衛に述ければ然らばとて藤兵衛ゝかの夷小判の百兩を渡しければ源次悦び改ため見るに何ぞ計らん似せ小判なれば大ひに怒りヤイ藤兵衛余の者なればこの樣なる計略にも乘るべきが相手ゝ手古良の源次樣だ余りに人を馬鹿にそるな其手ゝ喰まじ實の小判是へ出せといやひ腰にて詰寄れば藤兵衛ゝ些も騷が忠順禮より預り置し金ゝ此小判なり是が否ならよせといへば源次ゝ忍へ兼最早了簡相ならぬと一刀閃と拔き放して双方互ひに欲の一心負ぬ劣ぬ打合所へ明よ〳〵と表の戸を頻りに叩きけるもの有故藤兵衛ゝ源次に向ひ暫らく待べし面倒なれども何者なるや明て來るから先刀を引といひ渡し戸を明見れば一人の俠客順禮の女を引連れ跡に問屋場の役人金太およしの兩人を引立來り此時俠客ゝ藤兵衛に打向ひ其方ゝ順禮より預り置たる貳百兩の金を出

すべしといわれて藤兵衛仰天なし今殺したる順禮が何故爰ゝに來るかりと不審顔源次も是ゝと惘れ果猶亦かの男ゝ奥山よて逢し俠客なれゞ是惡事の顯われ口なりと此場を扱て裏口よりいつの間にやら逃失ける俠客重ねて藤兵衛にいひけるゝ子細あつて其貳百兩金ゝ此順禮の手に戻れり先一應其方の算筒の中を改め見よといひけるにぞ藤兵衛ゝ一切合点行ぎ先算筒の引出しを明見れゞ中ゝ皆〳〵蟬脱の殼なれゞ藤兵衛驚き是ゝ如何にと驅け迫るを俠客ゝ金太およしの惡事を述べ二人の縄付を出しけれゞ藤兵衛ゝ又も驚き忙然たりしが此時およしが惡行の段〴〵を悉皆〳〵白狀を致せしなりと云ひけれゞ藤兵衛猶も不審をなし先程源次が殺したるゝ全体何者なるやと雜用部屋へ行見れゞ其處ら邊りゝ血だらけにて疊の下を見るに大淵團にて卷し死骸のありけるゆへ早速捲りて是を見れゞ現在我子藤太郎なりけれゞ又もや肝を潰しけるが此時藤兵衛國定の前に進み出てゞけるゝ斯の惡事現在に天罰の程こう恐ろしけれゞ其場にて髮を切り出家となり已後惡行をゞ翻然と思ひ切りゝ故何卒御情を以て我らの惡罪を御赦免下さるべしと眞心ろ見へて詫けれゞ喜三郎國定ゝ其發心にめて、罪を免し取らそべしといひしかゞ藤兵衛ゝ大ひに悦び此家の家財を取片付是まで惡

事をなしける上我が怪の菩提の爲とて皆〳〵に暇を告諸國順廻をなさんとて何國を當といふ事もなく出立に及ひしゝ殊勝なりとぞ思われける猶又金太およし兩人ゝいろ〳〵せんぎの筋あるべきとて所の代官へ差出しに相なり裁判の上よて追放の罪に極まり奥州を所拂ひゞ付られけろ又喜三郎國定とお千代の兩人ゝ砂手村を立退神宮寺村を志ざしてゞ出行ける

第拾一回　尾崎富右衛門お千代に面會の事

扨も喜三郎國定お千代の兩人ゝ砂手を立退信州神宮寺村高橋市郎右衛門が宅へたより來て市郎右衛門にゞけるゝ此女中ゝ先頃當家に於て御厄介に相成りし畫師宗丹の女房にてゝ故姑く御世話下されたくと頼み置き其身ゝ大作の行衛を尋ねんとお千代よ別れを告其まゝ此所を立出て諸々方々に尋ね行ける扨市郎右衛門ゝお千代の藝道を試し見るよ女の嗜み一通り何知らぞと云事なく先第一に裁縫生花舞曲香茶なぞを達しけれゞ隣家の少女等日に集ふて琴三味抔を稽古に來りけるをお千代ゝ毎日是を教へけれゞ市郎右衛門も誠よ悦び我家の娘の如く寵愛なしけるにある日御大身の武家高橋市郎右衛門方へ御立よりとありけれゞお

千代ハ饗應萬端料理拵らへ床の間の生花までなして相待所へ愈〳〵代官御入宅になり先奥の別間に通しお千代ハ跡にて合羽籠を見て有けれバ劔酸漿に上に割書に尾崎と書印しあれバ自分が夫大作と同じ姓名同じ紋なれバ若や親類縁者の者にてハあらぬやと兎角に心を配り居る奥に有てハ尾崎富右衛門料理拵へ且床の間の生花の工合頻に打ながめ大ひに感じ主市郎右衛門を呼び此料理拵へと云ひ且又生花の手際實に感伏せり何人の拵らへ手業なるかと尋しかバ是ハ我家に逗留致すお千代と申女なりと云バ代官女にハ珍敷者なり一應對面致度是迄呼寄て呉かしと請ハれしかバ市郎右衛門ハれ千代を呼び來り自分ハ用事に立て行跡よハ富右衛門れ千代と差向ひ申けろ樣其方が料理生花の手際先程より感伏せりと御譽の言葉有しかバお千代此時申よふ恐れ乍殿樣ハ奥州南部の御藩にて尾崎富右衛門樣とハ申されぬやと尋ねしかバ如何よも我ハ尾崎富右衛門なり斯云ふ其方ハ何れの者なるやと尋られけれバお千代ハ私し事ハ江戸表にて戸坂内記の一女千代と申者にて御前の御子息秀之助樣と夫婦の縁をつなぎし者なりと語けれバ偖ハ兼〴〵中山幸之進殿より聞及びしお千代どのにて有つるかと互ひに盡せぬ物語よ暫し時刻を移しけるが先其日ハ過早明方よ至りけれバ代

官ハ市良右衛門を呼び此女ハ予が縁者の者故連歸るべし是迄永らく厄介に相成り忝げなく存ぜるなりと一禮を述てれ千代も厚く禮を述べ同道にて南部盛岡へぞ歸りける

因にいはく何故富右衛門代官となりて信州路へ來りしといふに南部侯には此ほど秀之助の忠義を聞し召れ感賞の餘り富右衛門を招き其方が怜秀之助我領地の爲め一命を惜まず粹身の忠義を盡す事最早予が心底に通じたり依て疾くも尋ね出し國元へ連歸るべしとの仰により富右衛門ハ諸々方〳〵を尋歩行けるとぞ

腕の佐吉恥辱を蒙る事

爰ゝ奥州桑折の驛より十八町片在ゝ今手村と云所あり是伊達三次が子分の壹人腕の佐吉の住所にて久〳〵に佐吉我家に歸りて見るに表ハ戸を締切てありけれバ不審に思ひ暫し彳ぜみてありけれバ隣家の人〳〵出來り是は〳〵佐吉さまあなたが永らく御留主で御座つたから飛でもない事が出來せり全体あなたも物騒な男の食客と女房を内へ置て一月儘よ二月と御留主ゆへ遂お久さんも凄さの余り出來し事ならんと云バ佐吉一切合点ゆかぞ何んぞ變な事でも發しなるやと尋ねしかバ變な所かお前さまが留主になつて其跡はれ久さまと食客の

金太と種〳〵ゝいちやつき差向で酒よ味噌よと買て來て夫は〳〵毎日〳〵晝となく夜となく見られた事では御座ぬ其あげくには道具家財皆賣拂ひ夫を旅用金にして此間二人連にて欠落致したりと話しけれバ佐吉は大ひに駭き申樣皆樣も一体浮切氣の無人かな其樣なる事のならぬ先に何故一應知らし下されぞや夫でハ隣家の好みも何よも無と答りけれバ人々は加〳〵の体よて各宅に歸りける跡に佐吉黙然として氣が逆上げ假令何國へ逃隱るゝとも搜し出さで置べきやと方〳〵を馳廻るに向ふより鶴塚團平といふ者來り途中にて佐吉とべつたりと出逢ひヲヽ誰かと思へバ團平じやなひかヲヽ手前ゑ佐吉かどふだ至極顔の色が惡ひじやなひかどふしたものだと尋ねられ佐吉申樣團平聞てくれ已が留主の間よれ久めがかしくの金太と不義をさらして何國へか欠落せしなり夫故に是から方〳〵と尋ねあるかんと思ふおりといひしかバ團平うれは誠に氣のどくだ併し其れひさ金太の居所は已が知つて居る此間いさゝか用事があつて疊屋直右衛門の方へ行しに火バちの傍に居つて居は慥に手前がゝ所れ久で有たからせりふがあれバ疊や直右衛門の方へ行べしと云ひつゝ團平は立別れける此事を聞て佐吉は大ひに力を得て其足にて梁川の驛なる疊や直右衛門が門口まで來て

樣子を伺がふに直右衛門が宅は間口三間よて格子造りの家なれば格子の透間から内を覗て見れば火鉢のうばよ表向きて坐て居しは女房おひさよてあれば佐吉は茫然し是正しくおひさ金太の両人なりと思しかば入口丁落離と押明ていきなり一刀引抜てかの男を見掛て打込べ男は恟り斗りに身をかはしければ佐吉は火鉢の縁中をしたゝか切付れば火灰散て煙の如く此時彼男は佐吉が腕首取かと摑み何奴なりと顔を見て手前は三次が子分佐吉じやないかといはれて恟り顔を見れば金太よあらで直右衛門なれば是はと驚き親分縁平御高免下さるべし實は私しが女房お久とかしくの金太と不義を致し聞べ親分の内に隠居有る由にて今其實否を糺んと格子の外より覗し所紛方なき女房おひさ又向ひに座りし親分を金太ゐりと見推ひ組怠千万何共ヤ謂なし何卒御勘弁下さるべしと恥みしかば直右衛門がヤ樣畢竟我が腕よ疑へば有て身をかはしたれば祖母々の者なれば汝トが爲に命を果すべし又不義ものを返せならば切て親分斯樣〳〵でと入謂云て來れば相手は男を磨く直右衛門だ夫れを兎や角といふ理なるや然るに唯出し拔に内へふみ込此直右衛門を踏付て致し方りれに何ぞや親分人違ひなぞとは屎がおきれる以後の見せしめ思ひ知れよと斗りに庭へ取て投ければ直右衛門の子分大勢來りて親分此奴如何致さんといへば直右衛門ヤ樣此所にて殺すべき奴なれども先達て三次と喧嘩を致したり夫に今此所で佐吉を切る時は直右衛門は未だ喧嘩の根を以て居るかと思われても殘念也依て今日の所は助けて取らせと子ぶん大勢足で蹴るやら痰をかけるやら犬の子を放り出す如くよ首筋を掴んで追出しける此時佐吉は心外なれども相手い大勢なれば虫をころして我家へ歸り一つの思案を定め親分三次が方へ來り申樣親分折入て御願ひ申度儀有といへば三次い六ッケ敷折入て願とい全体何の願ひ成やと尋ぬしかば佐吉い何とぞ私しに御暇まを下さるべしとしみ〳〵とヤければ三次わ佐吉が顔色と云且い樣子有氣な願ひなれば佐吉や手前へい何が心配で有や打明てヤべし親分子分の間柄三次が力に及ぶ丈けい事を斗るべしまさか見捨い致さずと云ければ佐吉大ひに悦び外の事にもあらず先達てより我ら留守中に女房お久かしくの金太と不義よ及び其二人りが惡屋直右衛門方に居る由を聞今日直右衛門方へ參りし所火鉢の傍に男と女房と差向ひで話しをせし故彼い金太なりと見違ひ飛込で切付しに金太に非ず直右衛門親分故へ早まつたりと事の次第を述て色〳〵と詫けれども一向よ承知なく子分の者大勢來りて我を打擲なし入口の外へ投出さ

れ大ひなる恥を蒙ぶり其場にて切死せんと思ひしなれども親分に一應御暇を貰ひし上にて
と心を定めたち歸りしとのゝの次第を一々に述ければ聞て三次ハ何事と思ひしに左樣の事
なるや其樣な事なれば此三次に一應相談せべ力にもおるべし其爲の親分子分あり此三次
ハ宜樣ゝ取計ふべしと三次ハ綱五郎を喚今佐吉がケ樣〳〵の譯にて直右衛門へ不禮を致
し又佐吉が女房と密夫の兩人を取返しゝ行て呉かし我が行も宜樣な者なる夫でハ事大行に
なるゆへ御苦勞乍ら手前が應對して呉れべしと頼みければ勇氣の綱五郎早速承知を致左あ
らば直樣參るべしと三次が宅を立出て梁川の驛壘屋直右衛門方へ行て案内を乞直右衛門親
分に些と御暇し致し度儀御座る故親分に左樣告げ下さるべしと云ければ子分此事を知らせ
れば出來たり是ハ綱五郎何用有て來りしと問ければ綱五郎申樣外の事でも御座らぬが今
日腕の佐吉が當家へ來りて何か不禮を働らきし由親分三次に代りて私しが幾重も御詫申上
ハ時に佐吉の女房が久金太といへる者と不義を致親分の内ゝ厄介成と承り何とぞ二人を
御返し下さるべしと言しかば直右衛門申樣手前の申分尤もなれとも此直右衛門も一旦隱匿
上からハ命ゝ代ても世話をするなり夫れも達て戻せとあらば三次か内の大事の客人と引換ゝ

致そべしと云ければ綱五郎も此返答ゝ困りしなれども流石の綱五郎否みもなさず夫じや親
分の望みにまかせ明日阿武熊が原ゝて朝六つ時ゝ双方取遣り仕べしと立派に返答なしけれ
ば直右衛門も左あらば翌日を期そべしと互ひに堅く約しける綱五郎ハ桑折の驛へ歸り此趣
きを逐一三次に話しけれハ三次申樣彼も名うての直右衛門なればよもや本人の金太ハ渡
そまじ又此方も實の客人を遣つてたまるべき綱五郎ハ横町の我家に歸り三次ハ子分を集め
申樣明日ハ阿武熊が原にて壘屋直右衛門と大喧嘩を致ゝより朝六つ時より皆〳〵揃ふて來
るべしと云置又一間へ大作を招き時に大作樣此度目明しに嗅出されし由にて明日斯樣〳〵
の大事件御身此所ゝ有てハ如何なれば是より始べらく身を隱し下され度私しが兄分にて
江戸鉄砲洲屋敷き横町ゝ鉄砲藤次といふ俠客御座る故是へ御便下さるべしと一封の頼み狀
を添て渡しければ大作大ひに歡び何から何迄其方の心遣ひ忝存るなり跡の所ハ頼又綱五
郎に宜敷傳へ呉べし其儘桑折の驛を立退き江戸鉄砲津屋敷横町鉄砲藤次方へとたとり行け
る

第十二回　阿武熊が原大取合の事

扨も翌日の早天より子分凡三百人斗り寄來べ三次い衆に向ひて中よゝ倡合直右衛門子分の如原刃物得物抔を持て爭そふとも此方い得もの壹木も持まいる事相ならずと嚴敷戒しける此時子分一統に申よふ高が疊屋の子分也得者抔持ずとも親より讓の兩手が有故拳を以はり倒さんと勇み居る子分のもの綱五郎最來るやゝ〳〵と待けれども未來らぬ既四つ時にも移けれども未だ來ぬ子分の者い癖をきらし三次よ向ひ綱五郎親分い臆病神に取付れて何所へか逃失しなるべし抔と利々惡口を罵りけれべ三次い綱五郎よ限つてい中々逃隱れぬべき者よ非ぬ最程なく來る可と子分をすかしける所へ向ふの方より綱五郎何か風呂敷包みを携さへて子分らよ打向ひ偖〳〵皆〳〵大ひよお待せ申て定めて御不興よありつらんと挨拶なしけれべ子分一統綱五郎親分にい別嬢のをくにさんと戯でもいふて御座たから此樣よ遲くなりしといひしかべ綱五郎打笑ひ是い〳〵異な事を聞ものかな我い女房と戯言抔を申て結束の時刻を外さんや女房おくにい如此な姿になりしと風呂敷の中よりお國が生首さし出せべ三次始め群居る子分ら大ひに驚き扨〳〵綱五郎親分の鉄石心よと皆〳〵感じ此勇氣に感ぜされ猶も一氣百倍を綱五郎申やう勘女房を斬て來からい更心殘り無しさあ皆〳〵衆ぱつ〳〵參ろでい御座らぬかと云い子分聲を揃參るべしと先駕の中に綱五郎を乘せ込み駕の棒鼻に三次ゞの控へ其外三百余人駕の周圍を取捲て意氣洋〳〵として歩み行此時身の丈抜群の大男駕の棒鼻よ手を掛て此駕如く得と呼いれべ三次を始一統の子分何如なれべ此爲体と大ひよ怒り手を下ろさんとなしける此男些も駭かぬ我社い相馬殿の家分國定喜三郎といへる者なり此客人い我が成べしと云しかべ三次綱五郎も兼て大作より弟分よ國定といふものあり聞及びけれべ扨御身が國定殿よな我い三次綱五郎といふ者にて相馬殿の家分も同盟なりと云しかべ互ひよ爰にて打解喜三郎を駕に乘せ棒鼻の左右に三次綱五郎兩人附添堂々として阿武熊が原まで來て見れい兼て其したる事なれべ直右衛門方にい惣二挺よ同勢四百人計り付隠ひ六つ過が待詫してありけれべ三次ゞ來るを見るより曳や々の聲詫とも傍近く進み來り直右衛門い客人の代りに綱五郎が駕に乘り來ると思ひの外綱五郎ゞの一鼻立て來りける故案よ相違それども二挺の駕を下し此方も一挺打下し先疊屋の隱慝人二人を出しける故見てあれべ前より知れたる替玉なれべ綱五郎此二人い人が逆おりと云べ直右衛門も其方い

客人と乞けるもへ喜三郎國定鶴の中より出でければ直右衛門申やう是も人が違ふなりといへば綱五郎大ひに怒り直右衛門よく聞べし其方より客人を所望そるゆへ客人を連引り此客人で無くば何故姐名を云ぎやや只だ客人とある故へ客人を連引るを人違ひ抔とい人を聞罵そるや了簡ならぎと怒ければ喜三郎も大ひに憤怒し大音よてヤイ疊屋の小童ゑ其客人を所望しながら人違ふとい言語同斷もりとい、つ、拳を振り上げ當るを弓ひに引倒せい直右衛門の子分の者ゑを迎そな打のめせて手に々鳶口或い割木金棒得物〳〵を携て國定目がけて打付る此時双方大聲上げ奮戰を實に單場の軍門よ異ならぎ直右衛門方よい得物を以て向こも三次方い無手よておれば三次い子分を厨し彼か得物を取て膨負せよ得物を出しなば食ふるぞと爰をせんど、差圖をなしければ我一に先を爭ふて得物を引たり直右衛門が子分目掛て打こそあれ瞬間ゑ疊屋の子分打延されけれども彼の方い大勢なれば必死と入替り双方共血の雨を降し死骸い積で岡をなし血いあがれて紅の川を生し鯨きを削る孔容い目覺しかりける事どもなり此時に在てい八州の役人數十人此喧嘩を見るよりも御用の聲を弘揚て召捕へんとなしけれども流石に奥州ゑ名を得たる俠客群の大取合あれば御用の聲位ゑ輝着

有ば社火花を散して打合〳〵おしけるい容易く騒動の止まざれども三次が方でい役人に手向かいぎ快よく捕縛に付ける故直右衛門方にも是非なく縛に付ければ役人の方々い召人を引連て所の役所へ拘引なしける

第拾三回　郡役所裁決の事

斯て役人衆い阿武熊が原の喧嘩の黨を御引立に相成郡役所にて御取捌きになるゑ伊達三次すゝみ出で申上げるよふい今日喧嘩の始末發端といふい私しが子分腕の佐吉なる者あつて其妻おひさおゝものと食客金太と密通をいたし家財有金等を拐帶欠落仕り其兩人が疊屋直右衛門方に世話に相なり右佐吉心外の餘り疊屋方に至り本人を取返さんとなしけれども直右衛門何か不禮をいふて一向に請がいぎ故に猶人を遣いして頼みければ直右衛門い我等の家の客人と引替にそべき樣答有し故双方阿武熊が原よて交換すべき約束仕り今日右場所にて取かへの所直右衛門本人を隱匿し置外人を連來りて人を欺きい又我方の客人を望みい故此客人を連行しに人違ゆの旨を述兼て喧嘩の仕組にや鳶口割木或い金棒抔を携て打擲せり又我方にい喧嘩を好まぬ證據にい得ものを持ぎ唯彼方より打汰得物を取て向ひしなり故

に聊不法を行ふと弁舌爽やかに申上げれば役人是を聞き直右衛門に向ひ其方ハ何故斯る亂暴を行ひしや逐一に申上べしと仰られしかば直右衛門自分の方ハ重〳〵惡ひ故返答につまり一言の言葉も得申上されば役人申様直右衛門一言の返答せざるハ三次の條に相違あしと見へたり是りや汝じハ聊か役用を勤めあがら公儀の恐れをも憚からず亂暴せし段不埒至極なり其方又急度所分も有誰かある直右衛門か宅へ到本人兩人引立べしと下知隨ひ下役ハ直ちゑ兩人を召捕役所へ引立來れば役人仰せあるやう金太おひさの兩人夫を頼ず密通いたせし段重々不届至極なり重罪にも行なふべき奴なれども格別の憐みを以て奥州國拂ひ申付べしと仰せられける此時喜三郎進み出て申様恐れながら此金太と云ふ奴先ころ砂手にて盗賊を働らき人の金子を掠め取り尚其上に女を勾欄せんといたせし所計ず私し此ものを召捕いを請をくハへて助けしに又もや此度の惡行不届なり我等金太を取計ふ旨もあれば何卒私しに給はるべしと願ひければ早速御許有ければ國定金太を貰ひ請其場にて眞二ッゑ切殺しける又直右衛門ハ所追放となり三次をはじめ皆の者ハ御構なく差もどされける

關良助須賀留備中守を狙撃する事

扨説相馬大作ハ江戸表鉄砲洲屋敷横町鉄砲藤次方に食客の身となり其身を忍びける又藤次も三次よりの添書もあり名高き大作の事なれば手厚く接て待ければ大作も大ひに歡こび暮しけるゑ爰に三月上巳の節句四方も祝ひの其折柄大作は誰彼時兩國橋邊を通り掛りしゑ前面より數多の供人を引連諸侯の下城と思しく嚴めしき行列にて前を拂ふて來るゝあり大作は若や須賀留ゑあらずやとうかゞふに案に違わず須賀留なれば能所にて出逢たりと大ひに悦び橋の傍へゑ身を潜め待居る所へ御供廻り意氣を正し堂々として御通行ゑ相あり今は殿の乘物兩國橋の中央にいたる時大作拔刀して躍り出乘物目差して切付る此時從士大ひに驚き曲者あるぞ召捕れと聲々に呼わり〳〵中を隔て、防ぎ戰ふ大作はたゞ只乘物ゑ近寄秘術を盡して切立薙立瞬く間に數十人を切倒し姑らく爭ひしが此時須賀留の扈從の臣大嶋何某殿の乘物を引搏げ橋を渡り踰んとなしければ大作は駕と遣てはあらじと必死を究めて付入しゑ大勢の從士に圍まれて心は矢猛疾れども思ふ樣に儘ならざれば心外に思ひ一聲叫んで飛と見へしゑ大嶋某を只一刀の下に切伏せ駕の垂を明んとするに猶從士間を斷大勢鋭く打込む刃に恰も眞叢の雨降るごとくなれば今は大作も危く見へし所へ川中より一發の彈丸大

響きを生して殿の乗物を打扳たり士卒大ひに騒ぎ立曲者遁すな召捕んと一生懸命の太刀先に大作もたまりかね橋の欄干に手を掛ると見へしが眞逆さまに川中さして飛込だり須賀留の士卒は水中にも曲者ありとこれをさがし又は殿が御身はと伺がへばはや駒先と打扳れて息絶たり是に從士も勢を落し死骸を乗物に舁て立歸れりまた跡に殘りし侍らひは急に船を手廻し川中さしてさがしける水中には大作は川上に泳ぎ行ける所へ向ふの方より一艘の答船漕來り泳來る大作の首筋掴んで引上げ船の中へと乗せ込て両國橋の上手をさし漕行て淋しき所へ船を繋ぎ船頭は大作に向ひ中様若や足下は南部藩よて尾崎秀之助仮の名ば相馬大作殿にてはなきやといひしがば大作不審の体よて斯いふ足下は何人にて御座あるやと尋ねしかば船頭中様我ころは同藩にて槍山奉行下廻り關良左衛門か一子同名良助いふ者なり足下の忠臣感ぜるに餘り數多南部の士ある中よ足下一人國地の爲に粉骨碎身の勞を盡す願わくは我も少々の助力仕たく思ひ候へば國を發足なし諸方を尋ね求むといへども貴殿一向に相知れぬ然るよ今日はからぬ面會仕り此上もなき身の大慶と悦び勇んで物語れば大作は左すれば兼て噂に聞し關良助殿にてありしや足下が助勢下さるとあらば誠によき片腕を得

たり然し只今の砲發は御身にて有しやと問しかば良助やう如何にも我ゝて聊か助力の端をなせしといひしかば大作は誠に御身の御手際恐れ入しと褒め時に良助殿我ゝ當時鉄砲藤次といへる者の宅に姿を隠し居候故此方に同道仕り萬事御相談ヤべしと是より兩人連立て藤次が宅へと立歸りける爰に又桑折の驛なる三次綱五郎喜三郎佐吉の四人も藤次が宅へ集り互ひに無事を賀し右七人の人〳〵ゝ霄夜種々の相談いたしけるに良助の物語りゝ我父良左衛門檜山奉行下廻り相勤めし所上役荒浪十藏治といふもの當時須賀留家に從ひ矢張檜山を支配せり此者元來南部侯より八十石の祿を頂戴せしに須賀留に引込られ二百石の祿をもらひ請非道にも二君に仕へける所が我父良左衛門が那魔ゝなる故父を欺むき大勢打寄て暗打になし足を切て谷間に蹴り落せり父ゝ命助りたれども身體自由ならず我此恥辱を雪がんと思ひ候故一度かの地に趣きたしとありけれゝ此時大作ヤやう左樣の事なれば片時も早く恥辱を雪ぎ玉ふべしといひしかば傍に居たる綱五郎及ばぢながら我等助勢仕るべしと是より二人同道にて南部檜山さして急ぎ行又大作ゝ藤次の傳手より江州琵琶湖の近在降高寺といふ寺へたよりゆきける

第拾四回　關良助檜山奉行を打事

斯て良助綱五郎の兩人ゝ旅の武者修行の風体に姿をやつし足に任せて漸々と日を重て檜山に至りければ日ゝ早西山に沒しければ奉行の留り所まて來り我等ゝ諸國武者修行の者にて計らぬも道に踏迷ひ誠に難儀いたし候故何卒今宵一泊をと頼みければ居合せし人足此事を奉行十藏治に知せければ武者修行の者とあらば一手合せ致したし此所へ案内ヤべしとありければ人足此由を兩人に告げゝれば二人ゝ大ひに悦びの体にて奥へ通り先荒浪に面會し今夜ゝ一泊を乞ふて御厚知下され千万有がたく存し候なりと一禮をのべてあれゝ荒浪ゝ誠に易き事なり今宵ゝ寛々休み玉ふべし我ゝ此樣な山中ゝ暮しければ世間の事を一向に知らぬ御身達ゝ修行の身なれば定めし珍らしき話しもあるべし疾々御咄し下されたしとて足下の生國ゝ何國にていづれも御藩なるやと尋ねしかゝ良助ヤ樣我か生國ゝ南部盛岡にて父ゝ關良左衛門とヤて其實良助なりと云より早く一刀抜放し妊賊十藏次覺念致せと近寄て肩口より袈裟掛に切付たり何條以て溜るべき其儘うの所に打倒れ此時綱五郎も奮激して有合ふ人足切倒し暫らくの間に凡十五人計り打取れば十藏次の忰重三郎雄敵とや思ひけ

たり然し只今の砲撃は御身にて有しやと問しかば瓦助やう如何にも我こそ聊か助力の儘をなせしといひしかば大作は誠に御身の御手際恐れ入しと褒め時に瓦助殿我い當時鉄砲藤次といへる者の宅に姿ゝ隠し居候故此方に同道仕り萬事御相談ゆべしと是より兩人連立て藤次が宅へと立歸りける爰に又桑折の驛なる三次綱五郎喜三郎佐吉の四人も藤次が宅へ集り互ひに無事を賀し右七人の人〳〵い晝夜種々の相談いたしけるに瓦助の物語りよ我父瓦左衛門檜山奉行下廻り相勤めし所上役荒涙十藏治といふもの當時須賀留家に從ひ矢張檜山を支配せり此者元來南部侯より八十石の祿を頂戴せしに須賀留に引込られ二百石の祿をもらひ請非道にも二君に仕へける所が我父瓦左衛門が那麼なる故父を欺むき大勢打寄て晴打になし足を切て谷間に蹴り落せり父い命助りたれども身體自由ならず我此恥辱を雪がんと思ひ候故一度かの地に趣きたしとありけれゝ此時大作ゆやう左樣の事なれば片時も早く恥辱を雪ぎ玉ふべしといひしかば傍に居たる綱五郎及ばずながら我等助勢仕るべしと是より二人同道にて南部檜山さして急き行又大作い藤次の傳手より江州琵琶湖の近在隆高寺へいん寺へたよりゆきける

第拾四回　關瓦助檜山奉行を打事

斯て瓦助綱五郎の兩人い旅の武者修行の風体に姿をやつし足に任せて漸々と日を重て檜山に至りければ日い早西山に沒しければ奉行の溜り所まて來り我等い諸國武者修行の者にて計らずも道に踏迷ひ誠に難澁いたし候故何卒今宵一泊をと頼みければ居合せし人足此事を奉行十藏治に知せければ武者修行の者とあらば一手合せ致したし此所へ案内ゆべしとありければ人足此由を兩人に告げゝれば二人い大ひに悦びの体にて奥へ通り先荒涙に面會し今夜い一泊を乞ふて御旅知下され千万有がたく存し候なりと一禮をのべてあれゝ荒涙い誠に易き事なり今宵い寛々休み玉ふべし我い此樣な山中ゆ暮しければ世間の事を一向に知らず御身達い修行の身なれば定めし珍らしき話しもあるべし疾々御咄し下されたしとて足下の生國い何國にていづれも御藩なるやと尋ねしかゝ瓦助ゆ樣我か生國い南部盛岡にて父い關瓦左衛門とゆて其悴瓦助なりと云より早く一刀拔放し奸賊十藏次親念致せと近寄て肩口より胸板さして唯一刀に切付たり何條以て溜るべき其儘うの所に打倒れ此時綱五郎も奮激して有合ふ人足切倒し暫らくの間に凡十五人計り打取れば十藏次の悴重三郎難敵とや思ひけ

ん門口より立出て警報の螺貝吹立れば此螺の音を聞付て檜山の人足凡三百人ばかり斧を以て集り來り曲者逃すな打延せと十重廿重に取巻て中に取圍み我劣らじと打かゝる綱五郎ハ事ともせず切立投立働と何條三百人の人足入替り差代り向ふ程に流石の綱五郎も大勢の爲に後に逶迤き怠て足の踏處を失なひ千尋の谷底へ轉落ければ人足共ハ此深谷に落てハ何條命有べきやと殘る奴を打倒せと大勢良助に打て懸る此方ハしれ者と事もせず礫投に投付々々左方へ飛でハ右方に顯われ一生懸命必死となつて打合しが怠て木の根に躓き倒れ伏す所へ人足ども上が上へ重なりて手取足取り良助を厂宇搦に縛上げ此山にて松井三平下調なし須賀留へこそハ引立行ける

闘良助所刑綱五郎義死の事

扨闘良助ハ檜山にて荒浪十藏治を打果し數年の本懷を達すといへども人足共の爲にめし捕れ須賀留に於て御しらべなりけれバ此ときに良助やう我こそハ此節御尋ね嚴敷配府の廻りし下総浪人相馬大作と申者なり法例に基き刑を受べしとありけれバ扨ハ相馬大作にてありしや汝じハ何故に我か須賀留家を執念深く斯まて敵對そるや已れ嚴刑に行なふべしと則ち仕置場を設け壹町四面の竹矢來をなし須賀留市中を引廻しの上にて刑所に至り檢使の役人ハ床几にかゝり見物山の如く矢來の外に集り名高き大作の仕置なれバ取〳〵に話しをなし見物いたしける此時良助ハ青竹の上に坐り太刀取の役人白鞘の一刀に水を流し太刀を振ひて傍に進み後手に廻り太刀を振かざして今や首を打ち刎となしける時竹矢來の外より大音聲にて役人其太刀下す事姑らく待べし其人を相馬大作にあらず定めて似名を騙者ならん眞の相馬大作是にありと群居る人々を押分〳〵這入り來りし者ハ大兵肥滿の侍らひにて立派ある出立其風体を見てあれバ先裝束ハ黒羽二重の着附に同じく水色羽二重の下着黒縮緬の背割羽織四十二節の深編笠に面体を包み從容〳〵出たる形相ハ是ぞ實の相馬大作とぞ思ハれける此時彼侍らひやう贋の大作殿にハ疾〳〵落延玉へ此實の大作が刑に付可と云つゝ飛掛て良助の組目を切拔て早々落延玉へと逃し置自分ハ傍なる太刀取の役人を只一刀に切倒せ此体を見て須賀留の士とも又もや曲者出たり召捕れ〳〵と差圖それハ有合ふ士も扨ハ侍らひ見掛て切付る此方の侍らひ事ともせず散〳〵に切倒せバ瞬間に死がいの山を積此とき須賀留の侍ひ追〳〵にはせ集り一人の侍らひを取圍んで戰ふ所へ三次佐

吉の両人なりと聲を掛れば綱五郎力を得て兄貴よくこそ來て呉たりと三人一時に切捲れば又もや曲者指たり須賀留の方でハ狼狽なしける此とき綱五郎戰かひながらもやう三次先今關良助を落したり早々ともに落延下さるべし此所ハ佐吉と両人にて殿り仕るべしといひしかば三次ハ此言葉に聞ひ綱五郎佐吉二人よ任せべしと其儘三次ハ落延けゝ綱五郎佐吉の両人ハ大勢を相手にして命限り働らきて今ハ二人とも血まふれよなつて仕合しが佐吉ハ數ケ所の重疵に身体働得ぞどつかと倒息絶たり綱五郎ハ猶もひるまぞ荒廻り役人數十人切り殺し手疵逢ふもの數知れぞ綱五郎ハ最早是迄と思ひしかば積重りし死骸の上に座を構へ手早く白繻ばんの片袖を切り裂き右の小指を嚙み切り垂る血にて一語辭世を書す

羅生門綱五郎

義に依て命を落そ日本の俠客

と記し死じたりける此体を見て須賀留の士どもハ興の醒たる如にて大ひに感けるとぞ扨又逃延たる關良助伊達三次の両人ハ桑折の驛へ歸りける

因みよ曰く三次佐吉の両人江戸表にありしに今此處に來り加勢そる事不審なれども左

にあらず右両人ハ良助綱五郎が首尾よく仕負たるやの安否を探らん爲奥州路に來りしに大作仕置の事を聞大ひよ驚き其事實を糺さんと該所に來る所良助大作と偽名を名乗て刑罪の有様ゆへ両人か加勢せしとぞ

第拾五回　相馬大作縛よ就く事

爰に又相馬大作ハ鐵砲藤次の世話にて近江湖水近在隆高寺といふ寺へ畫師宗丹と變名し身と隱しける然るに爰に疊屋直右衛門ハ處追放請しより何がな大作を嗅出し阿武熊が原の仕返し且ハ莫太の褒賞にも有付んと諸々方々と尋ね廻り斗らぞ江刹よ來り隆高寺の住職と至つて入魂なれば此寺よたより來り大作が隱慝あるを嗅出し馴染の講内四五人を語ひ大作を誘出し呉れべしと頼みければ早速承知し中よも宗丹と入魂よする者あれば湖水鮒獲を名として誘ひ出しける大作も元來漁を好みければ是に隨ひ十二人程連立て鮒漁よ來りしに二艘の船にて漁しけるに直右衛門方にてハ兼て其用意なしければ八方より大作を取巻召捕へんとせしかども何條名うての大作なれば容易よ召捕事能わざれども大作も船中なれば進退自由に働らき得ぞ難敵とや思ひけん湖水へざんぶと飛こみけり直右衛門ハ兼て手當なし置

関良助伊達之浜鈴ヶ森ニテ大作をタスケル図

し大綱と取出し八方より取圍み次第々々に寄ければ恰も海中にて漁父の魚を獲るが如くなれば流石の大作も此網に身を捲れ如何とも詮術なく其儘引上られ厂字搦みに縛れて所役所へ引渡され此役所にて下調なし此事江戸表へ報しければ江戸表より引渡すべき下知有ければ則ち網乘物に乘せ込て守護の役人三十人斗り附添ひて送り既に鈴が森まで來りける時傍の石碑の間より二發の鉄砲響きを生じて重役二人討倒せば守護の侍らひ大ひに驚きそりや曲者なりと狼狽して騒ぎ立所へ石碑の間より國定喜三郎鉄砲藤次の両人飛で出て當るを幸ひ切立々々散々に打のめせば守護の侍ひ度を失ひしどろになって逃出せば此間に両人鳥鵜駕を打破り駕の中より大作を出しければ大作い何者の仕業なりと顔を見れば國定藤次の両人なり大作大ひに悦び我斯召捕われしを如何して知りしやと尋ねしが藤次申樣其義い私し余義なき用向有て江府降高寺へ參りし所和尚の物語りに御身さまが傳てにて來りし畫師の宗丹い本名相馬大作といふ者ゑて去る日直右衛門といふ者の爲ゑ召捕われしと話しを聞て仰天し直樣宅に歸り此由を語り國定殿と申合せ此所ゑ待伏せしなりと云しかば大作い扨い左樣の事なるやと打悦び追手が來るを憚り長話しは惡と打連れ其儘藤次が宅へ歸りけれべ

又良助三次も江戸表へ登りければ五人打寄て話しをなし大作の事柄を良助三次に聞せ又良助三次ハ須賀留にて綱五郎佐吉の死去せし事を語りければ大作始良助藤次も不便の事を致せしと大ひに落涙に及び就中大作ハ我が爲に昔々斯迄なし呉る事の嬉しさと悦びあへり斯て晝夜となく相談して只々須賀留の動靜を窺ひける

第拾六回　大作妙見堂にて須賀留を窺ふ事

今日ハ大作良助國定の三人深編笠ゑて面体を隠し大師川原へ參詣して歸り來るを向ふの方より立派なる侍らひ深編笠ゑて女房と娘を連て來り今三人の者と行違ひしに侍らひ跡を振向き三人の姿をじろ〳〵と打詠めける故大作始良助國定も若や我々を探索する須賀留の家士か但しハ上の役人なるやと思へハ此方も彼の侍らひを打詠め居る此時侍らひ大作の傍近く跡戻りする故三人ハ扨こそ案に違ハぬと思ひしに彼侍らひ中やう若や貴殿ハ下総浪人相馬大作殿にてハあらぬやと問けれハ彌々以て心免るされずと思へども名を隠そハ余り比興と思ひ如何にも推量の通り我ハ相馬大作なりと答へけれハ彼侍らひ直に笠を脱て久々にて逢ひ中なり先ハ御壯健でと挨拶なそ是何處の人といふに加藤市郎右衛門といふ者にして貳

百石の旗本ゑて當時御馬廻り役を勤めり先頃大作下総秀吉となつて須賀留やしきの別當ゑ入込し時同じ別當の朋輩にて山下市藏といひし人なり父ハ御馬廻り役にてありし故修行の爲須賀留の別當ゑ成て馬の育方を試みしなり此時大作是ハ〳〵山下殿にて有しや珍敵所ゑて御對面仕るなりといへハ加藤中やう足下其時雀の宮にて須賀留殿を害し專ぱら忠名を上げ其上當今日に至る迄須賀留家を絶さんと千辛萬苦し給ふ其粉骨の勞を察し感服せり我ハ今父の家を相續せり又我宅ハ旗本の事也へ他方より探索もなければ姑く我家に身を隠し玉ふべし及ばずながら聊か助力仕るべし先〳〵我家へ來り玉ふべしといひしかば大作も此節ぞふやら藤次の内も氣遣敷けれハ兄弟の如くせし加藤なれハ良助國定ゑ委細を訳し爰にて別れを告げ其身ハ加藤市良右衛門方へ隠慝ハれける　日加藤ハ大作と連立て淺草奥山妙見堀へ魚釣りゑ行てありけるに須賀留の法被を着たる別當が徘徊なしけるを加藤ハ引留て縣舞の酒を振舞別當に中やう其身達ハ何用にて最前より此處を徘徊なさるやと問けれハ別當中やう何を隠そふ此程相馬大作とやら云浪人か厚を付頼ふ故夫を過んと妙見宮ゑ詣摩を修し給ひ明日ハ心願七日の上り日なり夫故我ら幾度も此處を往羽仕るなりと答へしかば左

樣なるかといひ別當ハ酔氣に觸れめは〳〵一礼を述て五六人の別當皆〳〵立去りける然るに加藤大作の両人ハ釣を仕舞此日ハ両人立歸りける

第拾七回　大作淺草妙見堂にて須賀留家を騒がせ事

扨も加藤市郎右衛門ハ其翌日に大作を招き申樣今日ハ足下壹人淺草妙見堂へ釣を垂れに御越しなさるべしと勸ける大作も加藤の身底を計り思ふやふ加藤ハわれを手引して斯申なるべしと大ひに悦び左あらば今日ハ拙者壹人參るべしと瓢箪に酒を入れ又竹の皮包に肴を入れて魚釣道具を携さへ立出て妙見堀へ至り釣と垂れある時ハ竹の皮包みを開て瓢より酒を出し自分壹人酒を飲干しける處如例のごとく須賀留の別當代〳〵に出來り大作が釣せしを詠めけるを大作ハ別當を勸め無止に酒食をあたへけるを別當等流石ハ下戸なれば大ひに歡び酒を飲大作ハ所存あれば思ひ切呑ましてありければ別當皆々醉を催しいろ〳〵戯事云了り大作ハ一禮を述て立去もあり又殘つて醉臥もあり大作ハ最好時分と思ひければ醉臥たる別當の印し伴天を脱し自分ハ其伴天を着なし釣の道具も何も打捨て妙見堂へ馳行けるば須賀留の人々も印し伴天を着せしゆへ誰有て咎むる者もなく通しければ大作ハ首尾好と心中に打笑み猶奥深く進み堂中を見てければ護摩を修せし焚火の煙りハて中の樣子一向に分明ならざれハ暫らく目を配りて伺ひ居るに殿ハ武運長久の聲はり上て祈れける此時大作得たりと悦び忍より懐劔抜放し殿を目ごのけて切付んとせしかば早くも殿ハ身をかハさんとせしかば狹き敷臺故に恐怖の余り高臺より眞逆樣に落けれハ傍ハ並居し須賀留の家士大ひに驚き十二三人程ど殿を圍て是を守る殘る士卒ハ曲ものやらじと取巻て召捕〳〵と聲〳〵に喚ハり切り掛る大作ハ殿を討んといろ〳〵あせれども何分大勢の士卒に隔てられし事なれば思ふ樣にならねば切齒をなし爰迄十分近づきながら打取れざる事殘念やと悔たれども詮方なく大勢に叶ひ難しとや思けん一方の間を得て足早にて逃げ出そを須賀留の士卒呼ハりて曲者逃そな追懸よと無二無三に追かけるを大作ハ一生懸命飛がごとく踪暗まして逃出し加藤が宅に立歸此事ともを市郎右衛門に咄しければ市郎右衛門夫ハ殘念の至なり又々好機も有べしといひ先其日ハ打過しけるにどふやら此節癪本の中ゑて相馬大作を隱匿ものある由誰云となく風説なしければ大作も此家に永居ハなるまじと思ければ加藤市郎右衛門に厚く謝禮を述て其儘此家を立退中山幸之進の宅ゑ行幸之進に面會して久〳〵の挨拶なしけれ

べ幸之進も我子の如せし大作なれべ殊の外歡び大作の忠勇を褒め日夜盡させぬ永話しなして先大作ハ此方に姑其身を潛伏專ら須賀留の動靜を窺びける

第拾八回　大作味噌屋と成て須賀留を窺ふ事
幷須賀留右京亮を砲殺そる事

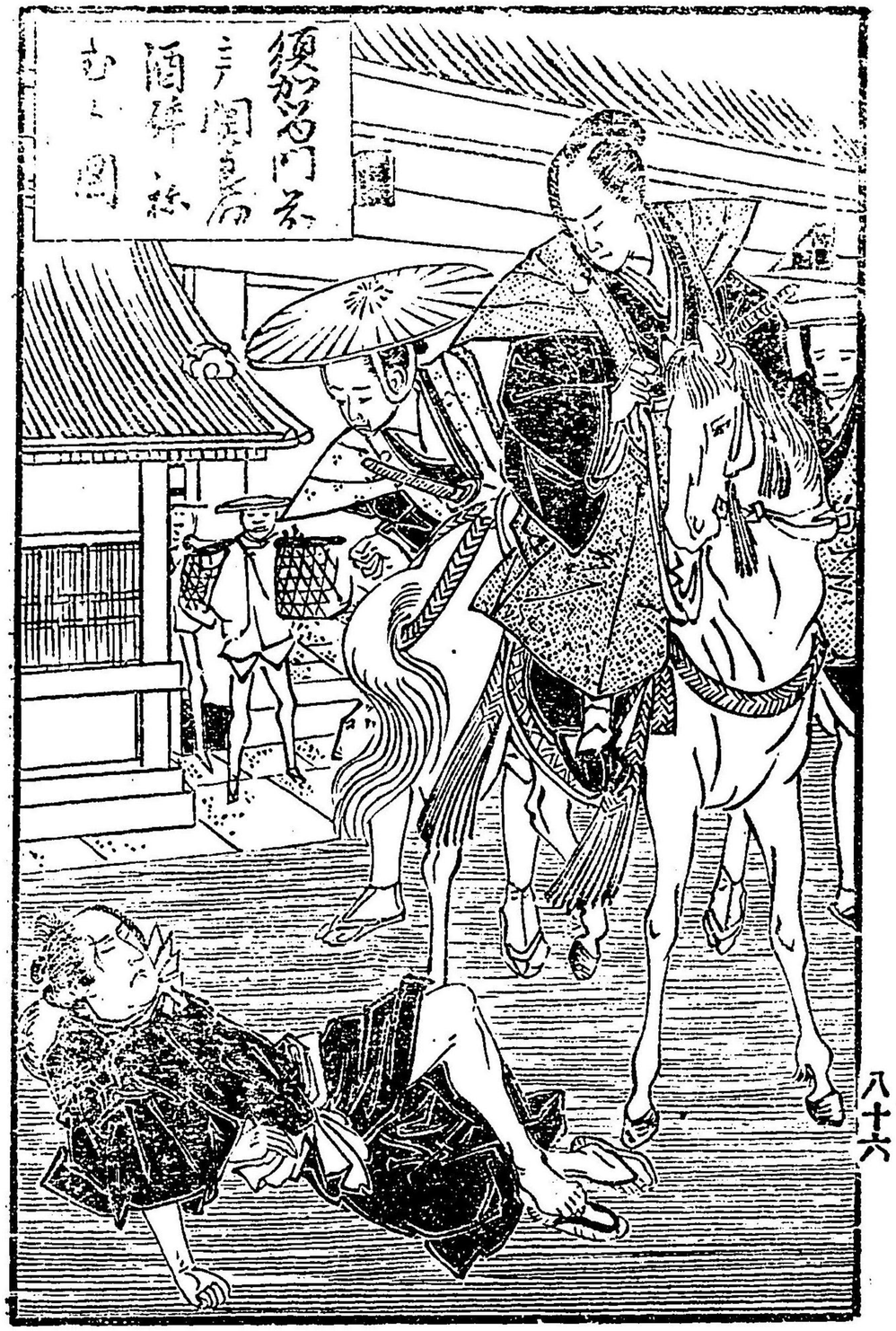
斯て大作ハ中山幸之進の宅に有て不斗赤穗義士の壹人堀部安兵衛武康の事を思ひ出し武康ハ吉良家の樣子と親に自分の顔一面に灸をそへて顔の躰を崩し八百家とあつて吉良家の邸中を知りしとあれべ我も斯せんものと思て直ちに自分の顔に漆を塗付けけれべ姑らくの間に顔ハ一面に腫れけるを鏡に寫し是なれべよもや人相書ゑ似る所少しもあらぜと打悅び古道具屋へ行て味噌屋の荷を求め金山寺味噌屋と成て毎日〳〵賣歩行一日須賀留の屋敷門前にて辨當と開ひて食をなしける所へ壹人の門番出來り味噌屋に向ひ手前ハ向ふ先の見へぬ者かな通行先の入口の鼻先で辨當食ふとハ無禮てあらふ少し片脇に寄べしと云しかべ大作ハ是ハ〳〵虛氣とせし眞平御免下さるべしと詫をなし其日ハ立歸る又翌日も須賀留の門前に至此度ハ壹朔德利より酒を出して無閑に呑み干し又門前に立寄けれべ別當又もや見付け

此奴毎日〳〵門前にて陰をなを奴かゐと叱けれべ大作ハ態と醉いたる風にて是ハ〳〵御門番樣御立腹の体なるや先あ〳〵其樣に怒る者に非世の醫にも笑ふ門にハ福來るとヲせべ先鎭まり玉ふへしあなたハ毎日怒て御座ると見へて私しの樣な難作者が門に來るべし抔といろ〳〵嘲哢おしけれべ門番大ひに怒り憎き味噌やの言前かなと棒を以て打んとそれべ大作ハ驚きし体にて味噌の荷を擔ひ旅〳〵の体にて逃出そ門番ハつふやきながら門内に入る其翌日になると大作ハ酒肴を持參し門番に向ひ昨日ハ酒に醉何か無禮をヲ上誠ゑ相濟ヲさぜ何卒御勘辨下さるべしと是聊なるものなれども私しが心丈け何卒ご御納め下さるべしと酒肴を出して詫けれべ谷の世界門番も此贈り物に氣を直しヲやう否何に味噌屋我等別に怒りハせねども餘りお言方故へに感して見せたりしなり決して怒るにあらぜ心置なく毎日門前にて中食いたそべしと手の裏返して云ひけれべ大作はしてやつたりと心中に悅び其日ハいろ〳〵話しをして立歸り其翌日より門番と至極入魂になり間がな酒肴を持參して十分に門番お取込み終にハ門番の取持にて屋敷中を廻るやうになし日數十日も立中にハ屋敷の部家〳〵或ハ中間別當の大部家迄大概廻らざる所なく皆々味噌やの正直を感んじて味噌や

〳〵とも て離しける一日例の如く屋敷中を廻り商ひ致しける所へ厚の御歸館とあつて大部家の向ふを御通行になるに大部家の別當共下座して頭首あす此時味噌屋の大作も見付られていならずと思ひければ大部家の中へ飛入隠れながら樣子を窺ひ厚が通か向ふへ行過ぎ玉ふと思ふ時分に大作い直ちに荷物の下の抽斗しより稙が島の短筒を取出し居列ぶ別當の後より覘を定め火門式切て砲發すれば惱れむべし須賀留右京亮殿の肴すじより駒板かけて打拔たり何條もつてたまるべきとつと斗りに打倒れ其儘息い絶たりける此有樣を見るよりもスハ一大事と須賀留家中曲者召捕れ〳〵と呼わり曲者い何所とかけ廻り家中の鉄々上を下へと混ざつなしけるを一人の家士やう慥かに曲者い宿を搖ひし者ありといひしかば士卒の者ども馳せ來り味噌や見詰て打て掛る此時大作い請つ流しつ打合しが厚さへ討べ士卒を惱まをい無益なりと思ひければ一方の道を開き大部家の武者惣より跡暗まして逃出すそりや曲者逃をなと怨の跡より追ふも又門口より出て追ふもあり爰に一人の侍らひ泥酔ひ千鳥足にて彼方へ蹉迤此方へよろめきながら追ひ來る須賀留の士卒を小口なら投倒し或い一刀の下に切付中に遮りて一向に追せを須賀留の士卒大に怒り又途中にて壹人駈きたり此者から打果せと打てかゝるを侍らひい事ともせを追來る須賀留の士卒を虱みごろしに片付てしづ〳〵と行過ける是何者成といふに關良助にて有しなり

第十九回　大作盛岡に歸り家續取決の事

扨も大作い中山幸之進宅に歸り幸之進に面會なしやう樣永々厄介に相なりけへども姑く他方へ行べしと一禮を述て暇を告げ直さま藤次が宅に來りて關良助に對面なしやう我等も最早須賀留家三代まで討とり絶したる上い自訴仕べくなれども取計べき旨あつて余義なく國許へ立歸りたく跡方自訴仕るべし足下い何卒先へ自訴をなし下さるべしと云しかば良助い然らば拙者先自訴仕るべしといひ互ひに堅くやう合せ大作い國定喜三郎伊達三次鉄砲藤治の三人を引連奥州南部盛岡さして立歸りけるされい關良助い大作をやう合せし如く願書を以て北御奉行の諏訪美濃守殿へ自訴いたし跡より相馬大作といふものも自訴仕るべき旨をもやう上しかば美濃守どのい關良助を取り調べ中禁獄仰せ付られけり爰にまた大作い奥州南部盛岡へ歸り久々にて二親に謁しければ富右衛門夫婦涙を流て大ひに悦び我子ながら天晴の舉動感するに余りありと譽うやし又女房の千代も大作の歸國に飛び立計悦こびうれし涙に



呉れ至しが姑あつてゆやう蚤へあなたに戀慕ひしより親の眼見をも用ひも難難苦勞をなし最早あなたさまに逢ふ事あらざるかと朝夕に思ひ暮しけるに今お顔を拜そる事の嬉しさよと疊にそがりて落涙せり此時大作千代に向ひ其方も我を斯迄思つれども我へ何條天下の御尋者にて大罪人就遁ぬ我が一命迚も其方とへ連れ添ふ事成ねバ疾〳〵斷念呉れかし又爰に居る國定喜三郎へ其方の爲にへ弟ぶんゆへに此國定と夫婦く成りて呉れかしと頼けれバお千代へ噎び涙だ猶彌增あらうたてや永らく待し甲斐もなく現在夫に逢ひ仆其御人に添ふ事ならぜと有バ何面目にこの世に在ん生て詮無事なるべし此上へ斯仕るといふより早々傍なる刀おつ取り自害をせんとなしけれバ大作驚是を止め早まるまじ其方が今爰で死そるとあらバ未來永〳〵縁きるべしそれでも其方へ承知かと云れて千代へ自害もならぜしは〳〵として歎き居る大作へ又國定に向ひ御邊も定めて斯樣なる水嗅女と添ふも嫌ものと思ひつらんが是へ大作が生涯の頼み聞き屆け呉れべしと頼みけれバ國定ゆ樣否〳〵我ちさに非ぜ斯たる貞婦のお千代どの我等何の否みゆべきや身こ取て大慶なりと答へしかバ大作大ひに祝重ねてお千代よゆやう我妹ちになる間潔祝言して呉れべしとかへそ〳〵も宥

つ賺つ頼みけれバお千代も思ひ回し自訴なさる御方に添ふ事のならざる如何程悔むとも詮なしと斷念承知に及しかバ大作大ひに悦び直さま祝言を致させ自分ハ媒ちとなりて尾崎の跡繼を立にけるとぞ

第二十回　南部大膳大夫侯大作に對面の事

斯て大作ハ父富右衛門より様私事須賀留侯を打取たる上ハ此上望み果しぬる事なれば潔よく自訴して御仕置を受可覺悟なれハ何卒今生の内一度殿南部侯に拜謁致度旨願けれハ富右衛門ヲよふ其方が願ひヲさすとも身より焦待佗玉ふ也と語りけれバ大作涙のみこむばかりなり夫より大作の歸國を待じけれバ殿ハ大ひに歡あつて早速御招ありけれバ南部の一家中此事を聞我も〳〵と見物に集ける然るに秀之助ハ御前間近く進みけれバ一家中の面々列を正しく左右に居並び秀之助といふ者ハ如何様ふなる人柄ならんと目を澄して見物せり此時殿ハ口面に座し玉ふ秀之助ハ殿の御傍近く進み寄り先ハ御壯健の体を賀す此時殿ハ落涙を遊ばされ其方事我が國地の爲に身命を投うち粉骨砕身の勞を盡す段予が膽底へ感徹せり過分存ぜるなり其恩賞よハ盛岡一の宮神社の片脇に相馬大權現と崇め祭り遣わそべしと仰

られけれバ秀之助大ひに悦喜し有難き殿の御仁恵かな聊かの忠勤をなせしに斯迄で御心慮よ叶ひし事私し身に取りてこの上もなき大慶なりとヤ上げ又殿にヤ上るやう私しが天下の法令に背き假初にも御歴々を三代ヨで打取たる其罪輕からぞ是によりて自訴仕りけへバ私しなき跡ハ父富右衛門事宜敷く御目を掛け下さるべし又家績の義ハ私し弟分國定喜三郎を以て相繼しけ故此義も願ひ奉りけおりとヤけれバ殿ハ其方願の趣ハ一々聞屆たれバ心安かるべし又江戸へまいる道にて不意の危難も難計けれバ予が印を以て供の者の大勢引連れ予が參勤の格式にて出府すべしと心添有て又秀之助に助力いたせし伊達の三次鉄砲藤次の両人に褒美金と賜ハりし上に永代貳百石の大祿にて御召抱へに相なり又國定喜三郎も右同斷賜物にて祿ハ貳百石の加增にてそれ〳〵賞を行なれける

并南部檜山取返す事附り大作瓦助刑に處する事

扨も尾崎富右衛門ハ南部全國の書圖面と願書をもつて時の老中へ願ひ出ける其文面に曰く乍恐願文を以て願上奉りけ今般須賀留家に於て猥りに我領山へ登り棒杭を立て八十三里の檜山を所領としてこれを奪ふ其故ハ原檜山我が領山たるに依り一度將軍家より用木を献

すべき令ありしに不孝にも公儀の令を背きしを好機とし須賀留家より間隙得抽んで用木を献せり是れ我領山へ斧斤を入れ横掠する所也何とぞ別紙書圖面御引合せの上にて宜しく御賢察懇願奉りけなり

右の願書を差上けれバ元來この事ハ御上よもよく御存知ありし事なれバ相違なき事論を待ぞして明らかなり是に依て一言の故障なく檜山を取戻しける又須賀留家ハ於ても打續き不慮の横災に罹られし末なれバ自然と衰弱に陷入押て一言の上達もいたさぞとなり爰に北御奉行訴訟美濃ヤ殿にハ大作を御白洲にて其方ハ南部の士にて尾崎秀之助仮名大作と稱する者で有ふがなと問れしかバ大作ヤう私しハ左樣なる者にあらぞ下総の涙人相馬大膳の悴にて同名大作といふ者に相違なく父大膳涙人して江州瀬田の湊にて横死仕れりよりて我ハ一人り身にて諸國備行の所悪行の者を斷をもつて誓願とすもへに須賀留の奸悪を聞き斯ハ相斗らひしなりと答へける奉行も見す〳〵尾崎秀之助たる事分明なれども義心忠勇の名にめでて敢て拷問もなく大作瓦助の両人法律に基づき斷罪の刑に行なれけゝ嗚呼忠勇なるかな大作瓦助のごとき者古來未聞の英士にて凡貳士の家に生育するものハ殿の馬前にて刮

死するか又い死をもつて諫言せし類をもつて忠義の者とする處大作などい厖の陰身に粉骨の勞を盡せ事實にまた古今稀なる忠勇の壯士にして其芳名を後世に遺すの美談といふべし

明治十九年十月三日
同　年十月　日

編輯兼出版人
發　兌　人
同
同

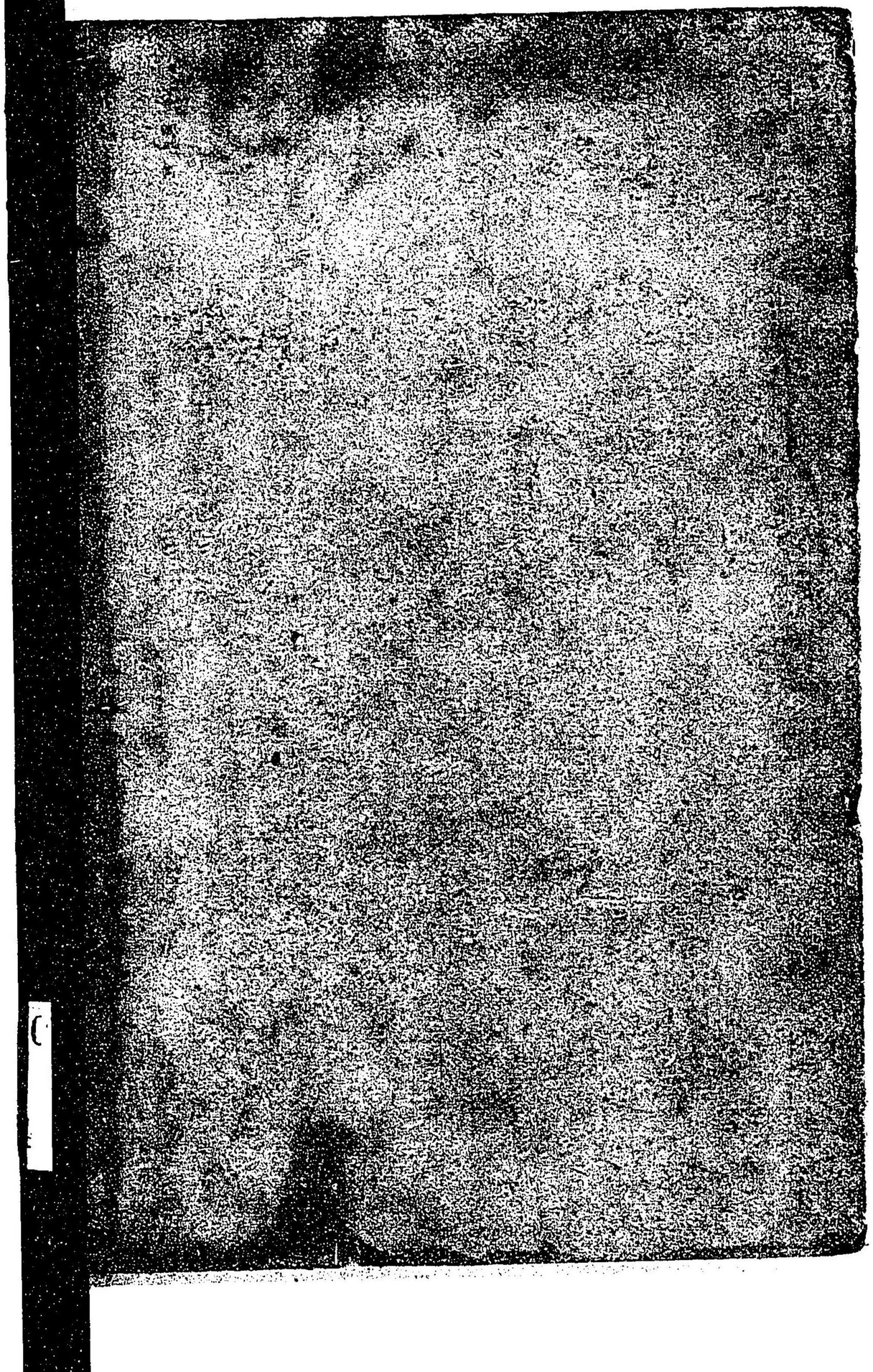
出版御届
發　兌　[illegible]金五[illegible]

東京府平民
多久正典
西區立賣堀三丁目十八番地寄留

大坂府平民
岡本仙助
東區唐物町四丁目十番地

大坂府平民
濱本伊三郎
東區北久太郎町四丁目四十二番地

大坂府平民
田中太右衛門
南區安堂寺橋通四丁目六十二番地



091318−000−6

特10−694

桧山相馬忠勇伝

多久正典

M19

DBN−2196